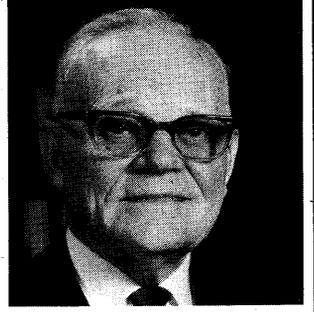
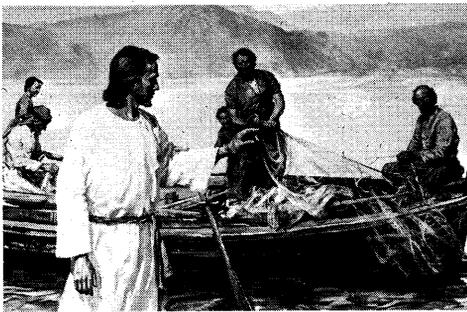


聖徒の道

1977年4月20日発行（毎月1回20日発行） 第21巻第4号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可

聖徒の道 4 1977





末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイブレー
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ベリー
デビッド・B・ヘイト

諮問委員会

ゴードン・B・ヒンクレー
マービン・J・アシュトン
L・トム・ベリー
マリオン・D・ハンクス
ジェームズ・A・カリモア
ロバート・D・ヘイルズ

教会誌編集主幹

ディーン・L・ラーセン

国際機関誌

ラリー・ヒラー (編集主幹)
キャロル・ラーセン (編集副主幹)
ロジャー・ギリング (デザイナー)

「聖徒の道」

八木沼 修一 (日本語コーディネーター)

1977年 4月号

も く じ

敬虔な民	スペンサー・W・キンボール	213
組織はまず家庭から	ライマン・D・プラット	215
古代に行なわれた十字架の刑の様式	リチャード・ロイド・アンダーソン	218
予言者であり族長であった父リーハイ	マーシャル・R・クレイグ	220
万能の人ニーファイ	アレン・E・バージン	222
ピンクの洋服	ドーラ・D・フラック	225
わたしたちの主、あがない主イエス・キリスト		228
Tシャツの宣教師		230
おもちゃばこ		232
「愛のひとかけら」	アーマ・ブラーク	233
イエス・キリスト―待ち望んだ賜	エズラ・タフト・ベンソン	234
福音の教授と学習		239
ローカル・ニュース		242

聖徒の道 4月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-8-10
配 送 東京ディストリビューション・
センター
東京都港区南麻布5-8-8
定 価 年間予約1,700円 1部150円
海外予約1,700円

INTERNATIONAL MAGAZINE Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0-41512
口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター

敬虔な民

スパンサー・W・キンボール

私たちは実に祝福されている民です。主は私たちに、イエス・キリストの福音、聖霊の光、神権、力、約束、誓約、神殿、家族、真理など、すべてのものを与えてくださいました。従って、私たちは地上で最も幸せな民と言えます。また最も敬虔な民であるはずで、ここで、すべての人が、すべての家族がもう一度自らを省みていただきたいと思えます。私たちは敬虔な民でしょうか。家庭や教会における態度は、造り主に対する敬虔さを示すものでしょうか。

教会の指導者である私たちにとって気がかりなことがあります。聖餐会や大会に出席して目につくのは、子供たちが親の手から離れ、通路でうろうろしていることです。また聖餐が配られているのに話をしている人もいれば、居眠りしている人もいます。また、玄関にたむろしている少年たちもいます。会の途中で入って来て、ざわざわと席に着く家族や、集会后礼拝堂で大声で話している人たちも見かけます。

これを見て、求道者や友人また証を得たいと思っている人たちは、どのように思うでしょう？集会は大きな伝道の世界であり、主のみたまがあふれ、人々の心にしみ入るものではないでしょうか。主のみたまを感じることができるよう、それを乱すものをまず取り除く必要があります。

では、敬虔について考えてみましょう。末日聖徒の生活における敬虔の意味とその大切さのほかに、子供たちに敬虔を教え、それを高める方法についても取り上げてみたいと思います。

敬虔の意味とその大切さ

敬虔とは「神聖なものに対する深い尊敬、愛、畏敬の気持または行ない」と定義されてきました。しかし、神に対する献身を表わすものであれば、すべて敬虔さを示すものであると言えます。

敬虔が人の最も高い徳のひとつであるということは、これまでたくさんの指導者が述べてきました。また、敬虔が神に



に対する真の信仰、神の義、高い教養、生活の中でのより繊細なものをいづくしむ心であることを指摘してきました。

神に対する敬虔

近代の啓示の中で、主は私たちが敬虔の意味と大切さを理解できるように、助けを与えてくださっています。

そこには、天父と御子に対する敬虔が、日の栄の王国に入るために、欠くべからざる特質であると述べられているように思います。教義と聖約76章を見てみましょう。1832年2月、ジョセフ・スミスとシドニー・リグドンに与えられたこの「示現」と呼ばれる啓示には、次のようにあります。

「またわれらかくの如く日の光栄を見たいども、こはあらゆる点に於て他より勝れたり、すなわち此所に於ては神すなわち御父その御座より永遠に治めたもうなり。

そもそも、父なる神の御座の前にはすべてのもの皆畏れ敬いて額づき、永遠に光栄を讃め奉る。

神の御前に住む者は「長子」の教会員なり。彼らは見らるる如く見、知らるる如く知りて、神の無上完全と神の恩恵とを受く。

而して神はまた彼らをして能力と、勢い、支配の及ぶ所を神と等しくならしめたもう。」〔教義と聖約76：92-95〕

神のみ名に対する敬虔

他の啓示では、神のみ名に対しても敬虔な気持を示すようにと言われています。すなわち御父のみ名を汚さず、またそれをむやみに使うことを避けるようにと教えられています。

〔教義と聖約107：2-4参照〕

このことは十戒の中でも言われています。

「あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱えるものを、罰しないでは置かないであろう。」〔出エジプト20：7〕

神と神のみ名に敬虔さを示すことは、私たちが高めることのできる最も大切な特質のひとつと言えます。

主の家に対する敬虔

主はさらにもうひとつのきわめて大切な面について、すなわち聖なる主の家に対する敬虔について語られました。啓示によってジョセフ・スミスに与えられたカートランド神殿献堂の祈りの中で、主は主のために建てられたすべての聖なる神殿は、敬虔さを示す所であると命じられました。

〔教義と聖約109：13参照〕

・教会の聖なる神殿について言われたこれらのことは、教会堂はもちろんのこと聖徒が礼拝に使用する所、ひいては末日

聖徒の家庭まで、あらゆる「主の家」にあてはまるものです。

敬虔と幸福

敬虔さとは、日曜日だけの一時的な態度ではないことを思い起こさなければなりません。真の敬虔さには、愛、尊敬、感謝、畏敬に加えて、幸福があります。敬虔さは、生活にあって大切な徳のひとつなのです。従って末日聖徒は、地上で最も敬虔な民と言えるでしょう。

敬虔と家庭

では、敬虔さはどこで養い、どのように高めたらよいのでしょうか。家庭が、神にふさわしいあらゆる徳を養う絶好の場であるように、敬虔さもまた、家庭において養われます。主は私たちが自分自身の家庭を評価することができるように、末日聖徒の家庭の標準を定められました。

子供に祈りを教えることは、非常に大切です。天父に祈るときに、頭を垂れ、腕を組み、目を閉じることを、子供は個人の祈りや家族の祈りを通して学びます。そして、家庭で学んだ事柄が、教会の集会での行動に現われるのです。家庭で祈るようになった子供は、礼拝行事の祈りのときは、じっとして、静かにしていなければならないと、すぐにわかるようになるでしょう。

同様に、家庭の夕べが家族の生活の一部になっていると、子供たちは教会だけでなく家庭でも天父について学び、敬虔にしなければならない時があることを知るようになります。

音楽は子供たちに特別な喜びをもたらしてくれます。教会で歌う讃美歌は、家庭でもなじみの深いものとなることでしょう。特に幼い子供には、両親が家庭で簡単な讃美歌を教えるようにするとよいでしょう。そうすることによって、子供たちは聖餐会や他の集会でも、自ら進んで歌うようになります。

教会での敬虔

言うまでもなく、両親は子供と一緒に日曜日の集会に出席します。

夫婦は協力して、教会に行く準備の時間を楽しいひとときにするよう心がけなければなりません。あわてて子供たちを集め、服を着せ、集会にすべり込むようであっては、敬虔な気持を抱くことはできません。

このようなことが習慣になってしまうと、いつも集会に遅刻するようになり、またどなったり、気分を害したりするよ

うになります。子供たちも集会中騒いだり、落ち着かなくなったりするものです。どの程度敬虔になれるかは、集会が始まる前によく準備したかどうかによります。すなわち、集会が始まる前に教会に着き、家族そろって着席して前奏を聴き、この世的なものを心から取り除くことができたか、どうかによるのです。

幼い子供のいる両親は、子供に集会の大切さを悟らせ、騒がせないようにするのに大変なときもあるでしょう。これを上手に行なうには、家庭での忍耐、堅実、準備が非常に大切な要素となります。教会で子供をどのように扱ったらいいのか、途方に暮れている若い両親は、ワード部の経験の豊かな人に尋ねるとよいでしょう。

集会の前後、会員が礼拝堂に群がり、あいさつを交わしていることがよくあります。この礼を欠いた行ないは、単にだれとでも親しくするとか、安息日は人を訪問したり、フェローシップしたり、初めて来た人とあいさつするのに絶好の時であるとかという理由で行なわれています。両親は、集会の前後、玄関先や礼拝堂の外であいさつを済ませるようにし、家族に良い模範を示すようにしましょう。集会後、両親は子供たちと集会で話されたことや音楽、また集会のよかった点について語り合い、集会のみたまを家庭に持ち込むようにします。

敬虔さを高めるために

一 れまで、敬虔の意味とその大切さについて考えてきました。また、家庭や教会で敬虔さを高める方法もいくつか提案してきました。しかし、人の態度が本当に改まるのは、各地域の指導者と家族が一体となって、敬虔さを育む上で障害となる問題を克服したときです。敬虔さを高めようとする努力は教会中に広まることでしょう。このような努力に応えて、私たちはできる限り援助し、資料を提供したいと思っています。

真の敬虔さは、欠くべからざるものでありながら、悪の力が強まりつつある今日、急速に失われてきています。私たちの内にある善をなそうとする力は、キリストの真の教会の数多くの会員が模範となって敬虔な行ないをするなら、私たちが考える以上に大きなものとなることでしょう。そして想像もできないほど多くの人に影響を及ぼすことでしょう。しかし、それよりもさらに大切なことは、私たちが敬虔な民として模範を示すならば、私たちの家庭は測り知れないほど霊的に奮い立たされるということです。生活の中で、さらに敬虔さを深めることができるよう祈ってやみません。

敬虔さを教える両親へ

A. 両親は、以下のことを行ない、子供が楽しく教会の集会に出席できるようにします。

1. 子供と一緒に日曜学校や聖餐会に出席する。
2. 楽しく、ゆっくりと教会に行く準備をする。
3. 集会の開会時間の10分前に教会に着くようにする。
4. 家族そろって着席する。
5. 集会の後、その集会での話や音楽、良かった点について語り合う。

B. 幼い子供をもつ両親は以下のことを行なうようにします。

1. 子供に、今何が行なわれているのかを理解させる。
幼い子供は、ぬり絵や絵本などがあれば、静かにしていただけるものである。しかし、なるべく集会について子供に理解させることが大切である。ワード部のビジネスや話について、少し説明を加えると、今何が行なわれているのかを子供に伝えることができる。例えば、父親は「今話しているのは憲一君のお父さんだよ。開拓者についてお話しているよ」などとささやくとよい。

2. 歌を強調する。

歌うことは、集会の中で子供が最も楽しめるものである。家庭で簡単な讃美歌を歌ったり、子供に教えたりすることによって、子供の興味を呼び起こすようにする。ワード部音楽指揮者は今後の集会で歌われる讃美歌のリストを配布するものよい

3. 家庭や初等協会、日曜学校で学んだ礼儀作法を強調する。

祈りのときは腕を組み、頭を下げることを、また聖餐式の間は静かにしていることを、子供に思い出させる。集会中に通路で遊んだり、礼拝堂の外に出たり入ったりすることは無作法であることを、子供に理解させる。

4. 模範を示す

両親自ら話によく耳を傾けるようにし、子供には自分のまねをするように言う。

5. 子供が集会に臨む準備ができてい

かどうかを確かめる。
手洗いや水を飲むことなどは、集会が始まる前に済ませる。

組織はまず家庭から

ライマン・ド・ブラット

家族で伝道、系図、福祉、家庭教育に取り組みたいが、どうすればよいかと迷っている父親の皆さんへ

父親の皆さん、あなたはこのようにつぶやいたことはありませんか。

「よくわかってはいるが、まだ家族そろって朝晩ひざまずいて家族の祈りをしていない。」

「隣の人のがきのう引っ越して行った。引っ越して来てからそれほどたっていないのに。彼らに会ってゆくゆくは福音を知ってもらおうと思っていたのに、とうとうその機会が持てなかった。」

「わが家の息子たちもそろそろ伝道に出る。気持だけは十分あるんだが、お金がたまってないなあ。」

「菜園はいまだに遊んだままだ。」

「おばあさんは若い頃の有益な体験をたくさん話してくれた。生きている間に記録しておけばよかった。」

「家族があまり調子よくない。いつもだれかが病気をしている。家中で何か運動でも始められたらいいんだが。」

「ローリーは教会のことに興味を失ってしまったようだ。どうしてだろう。どうも心配だ。」

「ジョーも来年は高校卒業だ。しかし卒業したら、どんな仕事につくか、どんな学校に行くか、まだよく話し合っていないんじゃないかな。」

「子供は何と大きくなるのが早いんだ。大きくなる一方だ。それに引き換え、聖典の方はさっぱりだ。」

「系図調べが大切なことはわかっている。あれこれ言いながら結構やってきたつもりだが、今年は去年よりさっぱり進んでいないなあ。」

「父親として、神権の使い方がどうも不十分な気がする。本当は神権を行使していないんだ。管理ができていない。成行きまかせていう感じで、自分が管理しているという充実感がまるでない。」

あなたはどのどれかに心当たりがありませんか。ごく普通の父親であれば、心当たりがあるはずです。あなたは時々、神の王国におけるひとりの父親として自分に求められていることと、自分の行ないや家族の進歩の様子を引き比べてみたことがあるでしょう。そして多分いろいろ期待されていることにそぐわない現実を目にしてきたことと思います。それはどうしてでしょうか。信仰とか正しいことをしようという望みとかの問題ではありません。家族をどのように整えるかという問題にすぎないのです。

私たちの父祖アダムを例に考えてみましょう。

アダムは死ぬ3年前に、アダム・オンダイ・アーマンの谷に義人の子孫を集めました。その家族の集いに主イエスキリストが来られ、アダムに対して、すべての父親の胸にたたむべき言葉を告げられました。

「われ汝を立てて首長となす。……汝は永遠にその君たるべし……」（教義と聖約107：55）

アダムは義の生涯を通じて、その荘厳な集いに集った子孫に福音の救いの原則を教え、それによってキリストの下で、永遠に存在する神権の族長制度における民の始祖となりました。アダムは、私たちのこの時代を予期し、「聖霊に感じて」こう語りました。

「始めより在りしこの神権は、この世の終りにも在るものなり。」（モーセ6：7-8）

従って、自分の家族に目をとめ、彼らもこの神の永遠の家族の一員となれることを知っている私たちは、自分が子孫にその目標を達するために必要な事柄を教えているかどうかを真剣に考えてみなければなりません。

どの家庭でも、この神権の秩序に従って、日常生活の必要のみならず人生のもっと高い目標をすべて達成するためには、家族に計画と準備をさせなければならないことがわかるでしょう。

これらの目標として、物質的な福祉や霊的、社会的、知的な進歩、レクリエーション活動、伝道活動、系図と神殿活動に関するものがあげられます。言い換えれば、理想的な家族は神の王国に倣った形態を具えており、家族が経験を増し、人数が増えるにつれて、変化しながら発展する柔軟性を持っているのです。そこには、各人が生活全般においてそれぞれの最高の可能性に向かって協力しながら成長できる空気が生まれます。

教会の全家族は、新婚の夫婦から経験豊かな家族に至るまで、自分たちの様々な要求を満たすために、祈りと熱意をもって計画を立て、準備を始めることができます。早ければ早いほどよいのです。というのは、子供たちが適切な訓練と敬いの心、献身、信仰、知識、謙遜の中で育つためには、多くの土台を据え、習慣を確立する必要があるからです。

その骨格になるのが神権に関する基本的なプログラム、

すなわち福祉、伝道、系図の活動です。

福祉

福祉には、家族一人一人の霊、体、情緒面での福利が含まれます。父親と子供の個人面接、家族会議、家庭の夕べ、健康増進をはかる運動や家庭貯蔵、家庭菜園の計画、家族各人の職業教育計画、財政管理なども入ります。

1975年4月5日の総大会の福祉事業集会でH・バーク・ピーターソン副監督は次のように語っています。

「家族の備えとは、賢明に備えをなすことにより、予知や予測のできる事故を未然に防ぐという意味での備えである。」

専任宣教師やその地域で宣教師を援助する教会の組織に協力して、伝道活動に一番の責任を持つのは家族です。

子供のいる家族の伝道活動の一部をなすものとしては、伝道資金の貯蓄、伝道の準備、ワード部や家族の伝道プログラムへの参加が考えられます。そして何よりも、青少年に伝道の準備をさせることが家族の大切な責任です。父親は、息子が将来伝道に出る準備ができるように教えないければなりません。男の子は伝道のための貯金をし、両親と祖父母は、いつ伝道に出るか、彼に話しておく必要があります。

また、他の家族と親交を深めることも教会のすべての家族の責任です。親しくしている家族のために全員で祈る家庭、月に一度以上他の家族に何らかの方法で愛を伝える家庭、教会に家族を招いて福音の喜びを分かち合う家庭、これらの家庭で育つことは、子供にとってどんなに大きな祝福でしょう。

系図

系図活動は、子供に家族の絆と先祖から受け継いだものを大切にするように教えることから始まります。聖典と並行して子供たちを教えるのに使っている家族の覚えの書にさらに記録を加えることや、自分たちだけでなく、祖父母、親戚などに心を配ること、系図を調べ、神殿の儀式を受け、引き続いていろいろな活動に参加することは、皆そのための方法です。

人間が天父と違うひとつの点は、記憶が不確かであるということです。細かいことだけでなく、人生において何にも増して優先させなければならないことや誓約まで忘れてしまうことがあります。その弱点を補うものとして、天父は記録をつけることを命じられました。

教会は、記録する必要のあることはすべて記録しています。決定事項、出来事、啓示、説教、儀式、会員記録、これらは皆、神の王国の覚えの書となっています。それと同じように、家族の記録の神聖な目的は、家族という王国の民に救いを得る上で役立つ事柄を覚えさせ、また同じことを他の人々にも教えることができるようにすることです。覚えておかなければならない最も大切なことの中には、福音の原則、個人の神聖な経験や啓示、家族や先祖のために施された儀式、先祖の個人的な歴史などがあります。



子供が人生の進路や職業を決めることができるように助けることも、家族の福祉です。



教会員でない家族と親しくなった時、あなたの家庭の愛と幸せが福音を教える最良の教師となります。



家族の歴史は遠い過去のものではありません。毎日つづられていくものです。



家族のみんなを助けるためには、家族に必要なことをいつも知り、また自分の進歩をはっきり見つめることが大切です。

家庭教育

以上の3つをひとつに結ぶものは、当然のことながら、ホームティーチングを含む家庭での教育です。

父親は福祉、伝道、系図について、初めは両親、後には神権定員会の指導者から自分の務めが何であるかを学びます。そして、自分の務めを書き込んだノートを作り、いちいち気をつけるまでもなくその責任が果たせるように、また毎日自分の進歩がわかるようにすることでしょう。そうした時に、これらの務めや王国のすべての教義を家族に教える備えができるのです。また与えられている神権を行使する準備もできます。ホームティーチャーが定期的に家族を訪問することは、これを確実にこなせるようにするのにとても大きな助けとなります。

このような教えを受けた家族は、聖きみたまの快く力強い影響力の下で、急速に進歩します。夫婦は高貴な子孫の頭となったアダムとイブのように正義にかなった成長を共にします。家族を整えることの意味はここにあります。家族をよく整えるならば、やがてその伝統は子供たちの家族を含む大家族にも及ぶことでしょう。

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は、家族組織を永遠の流れの中に置いて、こう語っています。

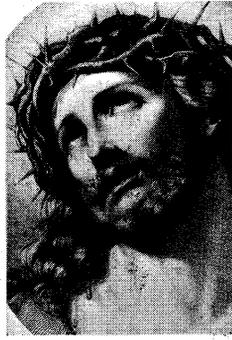
「私たちの交際は、永遠から切り離してもっばらこの人生に限られるものではない。私たちは今も永世にも生きている。私たちの交際と関係は今も永世にも及ぶ。愛と望みがこの現世だけでなく永遠に続くことは、願わしく、喜ばしい。死後も家族の組織が存続し、父、母、子供が互いに対する関係をそのまま見いだすという思想を抱いている者は、末日聖徒をおいてほかにいるだろうか。家族組織は神のみ業における偉大で完全な組織の一単位となって、今も永世にも続くことが定められている。」（「万物の回復」1944年12月3日、KSL放送での説教より）

父親が家族に対する責任を果たそうとする時にできる一番のことは、主の宮居について言われていることを自分の家庭の規準とすることです。

「汝ら組織して必要な物をことごとく調べよ。而して、祈りの家、断食の家、信仰の家、学問の家、栄光の家、秩序の家、神の家なる一つの家を建つべし。」（教義と聖約88：119）

どのような父親でも、このようにするには研究と計画と祈りと犠牲が要求されます。しかしその父親と家族を待ち受けている祝福を考えるならば、努力を払うだけの価値が十分にあることがわかるでしょう。あなたの家族が王国のいろいろなプログラムになまぬるい態度をとり、ただだらだらと流されているだけならば、ぜひ家族を組織して整えて下さい。そうすることはあなたにとって利益となり、大きな助けとなるでしょう。これは、末日の時代の福音の一部なのです。

（ライマン・ド・ブラット 教会系図部教育活動スペシャリスト、ペイソン・ユターストステーキ部スプリングレークワード部日曜学校教師）



古代に行なわれた 十字架の刑の様式

リチャード・ロイド・アンダーソン

イエスの時代に十字架にかけられたエホハナンのがい骨が最近出土し、古代の十字架の刑に関する私たちの知識が問い直されている。4つの福音書は共通してイエスの処刑を驚くほど簡潔に記している。古代の読者は十字架による死刑の恐ろしい手順に通じていた。そこで現代の読者は古代の文物をひといて、何が当時の読者にとって当然のところと考えられ、新約聖書記録者の筆にかからなかったかを知らなければならない。その知識を持って4つの福音書を読むなら、救い主についてさらに深く理解することができるようになるであろう。その上に考古学から得られた新しい物的証拠が伴えばなおさらである。

主はローマの領土内、すなわち十字架の刑が日常茶飯事であった所に住んでおられた。この極刑は、ヨセフスの描くいたげられたパレスチナの記述が如実に表わしているように、臣民を鎮圧する常套手段であった。ヘロデ大王の死後エルサレムで反乱が起こった時、シリアの総督は軍団を率いてガリラヤを通りエルサレムに進軍した。そして2千人の謀叛人を十字架につけた。(Antiquities「古代誌」

17:295)

後に紀元66年にユダヤ戦争が起きた時、行政長官ゲシウス・フロルスはエルサレムの町で無差別に人々を殺害したり、数多くの市民を逮捕したり、「先ずむち打って、それから十字架にかけよう命じるなどして、激しく報復した。戦局が頂点に達したのは紀元70年、後に次の皇帝となったローマの将軍ティトスによってエルサレムが残忍な包囲攻撃を受けて孤立した時であった。その時貧しい階層の人々は飢えに耐え切れず、食物を求めて要塞から群れをなして抜け出した。ローマの典型的な恐怖方策によって、こういった何百人もの人々が毎日拷問にあい、町の城壁からよく見える所で十字架にかけられた。(ユダヤ戦記」5:449)

この容赦のない罰が下されたのは、盗賊と謀叛人に対するよい見せしめにするためであった。古代の人々は十字架の刑を恐怖の筆致で記録している。キケロの歴史は十字架による死刑を一貫して忌み嫌っている。十字架の刑は「奴隷に対する極端な、最後の処罰法」であって(Against Verres「ペレスに駁す」2.5.169)、「最も残忍で最も

嫌悪感を起こさせる処罰」である。(同上2.5.165)ヨセフスは「最も気の毒な死に方」と呼んでいる。(「ユダヤ戦記」7:203)イエスは生前福音が求める困難な犠牲を負うことを、「十字架を負う」と表現された。(マタイ16:24参照)

十字架について書かれた初期の記録は、福音書の具体的な記述が正確であることを示している。ルカの序文が述べているようにキリストの生涯と死に関する新約聖書の記述は、直接目で見たと証人か、証人の言葉を調べた人によって書かれている。ローマの総督がやむなく宣告を下した後、イエスは自分の「十字架」を負うように強いられた。古代の資料はこの慣習をもっと詳しく書いていて、この慣習の存在を確認しているが、資料によれば十字架の縦の棒は恐らく処刑の場にあつたと思われるのに対して、罪人は横の棒を運ばされたのであった。「十字架」と訳されているギリシャ語スタウロスには「杭」という意味もあり、明らかに十字架全体はもとより十字架の一部を描写するのにも使われた。またイエスの頭上につけられたような称号も古代の記述の中には時々現われている。

福音書は主が「十字架につけられる」くだりを明瞭に記載している。復活したイエスは明らかに処刑によって傷ついた部分、すなわち手、足、脇を示された。疑い深かったトマスは、イエスの手にある「釘あと」を見、それに触れることを許された。(ヨハネ20:25)ヨセフスがローマ軍に降服してから見聞した例を含めて、初期の無数の記録に囚人が十字架に釘で打ちつけられたことが記されている。捕らえられた同国人が十字架にかかっているのを眺めていた彼は、自分の友人が3人その中に入っていて苦しんでいるのを見て仰天した。感情的に深い痛手を受けた彼は総指揮官ティトスに3人を助けてやって欲しいと嘆願した。そこでティトスは3人をおろしてできる限りの手当てをするように命じた。しかし3人の内ふたりは医者の手当てを受ける間に死んだ。この事実は、あらかじめえられるむち打ちが受刑者に傷を与え、

さらに極限状態の受刑者に釘が打ち込まれることによって苦痛が頂点に達する様を生き生きと表わしている。単に人を縄で十字架に縛りつけるだけでは、恐らくこれほどの残忍な結果を引き起こすことはなかったであろう。

イエスの足には釘が打ち込まれたのだろうか。ルカはイエスが「わたしの手足」を調べなさいと語られた、と記録している。手足にイエスであることを示す傷跡があったことは明らかである（ルカ24：39参照）。しかし一部の人はこれははっきりしていないと言っている。1932年に*Harvard Theological Review*「ハーバード神学評論」に載ったある記事は、「ローマの十字架の処刑で足に釘が打ちつけられた可能性はあまりない」と書いている。しかし、恐らく十字架の刑を目撃していたと思われる3世紀初頭のテルトリアヌスの残した書物を読むと、このような懐疑論者の説も怪しくなってくる。「私の手と足を刺し貫いた」という詩篇22：16を引用して、テルトリアヌスはこれが「十字架の特に残忍な点である」とあっさり述べている。（*Against Marcion*「マルキオンに駁す」3：19）新約聖書では言外に示されているのに対して、モルモン経では復活された主がはっきり次のように語っておられる。「わが手足にある釘あとに触れて、われがイスラエルの神」であることを知れ（IIIニーファイ11：14）と。近代の啓示も「わが手足にある釘痕」について語っている。（教義と聖約6：37）

最初に発見された十字架の考古学上の遺物は足に釘を打ちつける慣習があったことを示している。エルサレムの近くの幾つかのほら穴墳墓の中から、遺体が墓の中で腐朽した時に骨を入れる石の箱や無数の骨つばが1968年の夏に発見され、1970年に*Israel Exploration Journal*「イスラエル精査誌」に発表された。この埋葬に使われた陶器を分析したV・ツァフェリスはこれらの墓を紀元前1世紀と紀元1世紀、さらに狭めれば、紀元1年と70年の間のものであろうと推定した。解剖学の教授N・ハース博士はエホハナンの遺骨について詳しく解説しているが、それは十字架にかかって死んだしるしを

若干残している。最も印象的な証拠は、17センチの長釘がエホハナンの両かかとを貫いて、オリーブの木切れに打ち込まれていたことであった。今日まで大部分の学者は、受刑者はかかとを貫いて十字架にかけられたとするハース博士の見解を受け入れている。イエスの同時代の遺物が示すこの証拠は、パレスチナで行なわれた十字架の処刑が両足を刺し貫くものであったことを示している。

この最近の発見は、ほかにふたつの大きな意味を持っている。そのひとつは釘が手のどの部分に打ち込まれたかということである。新約聖書はイエスの手にあった傷跡に言及している。初期のギリシャ語の文書では手というのは厳密にどの部分を指す言葉であるかはっきりしなかったが、新約聖書の時代では一般に英語の“hand”（従って日本語の手）と同じようにどこを指すかがはっきりしていた。新約聖書の中で手が上腕部あるいは手首を指す用例は全く見当たらない。ほかにも釘が用いられただろうか。ハース博士はエホハナンの右橈骨（腕を伸ばした時に上にくる骨）に表面の傷ひとつとよく目につく摩滅箇所一箇所があるのを観察した。そして博士は前者を最初に釘が切り取ったものと見、後者を受刑者が十字架の上でのたうち回る間に摩滅したものと見ている。骨の上に残っているこの傷跡は、構造上釘を打ち込むのに安定した場所、すなわち上腕部の2本の骨の間にできている。新約聖書を厳密に読んでもわかることであるが、さらにこの証拠があって、手や手首にも釘が打ち込まれたことが推定できる。

こういった見解を読んで受刑者の体重全体が上腕部あるいは手に打ち込まれた釘で支えられたと考えるには及ばない。新約聖書にすぐ引き続いて、ユスティヌスは十字架の中央に突出部があってこれが受刑者の体重を支えたと語っている（*Dialogue*「対話」91：2）。同時代のイレナイウスは、「釘で固定された人」はこの粗末な「座席にすわった」と言っている（*Against Heresies*「異端反駁論」2, 23, 4）。言い換えれば、体を支える主要な役割を果たしたのは釘ではなく、当座しのぎ

の腰かけであった。テルトリアヌスはこれを「突き出た座席」と呼んだ。（*Ad Nationes*「国民へ」1：12）これは直接新約聖書の記述を弁護する証拠ではないが、以上のような初期の学者は、長時間懲罰の苦痛を与えて殺そうとする通常の古代の慣習に通じていた。

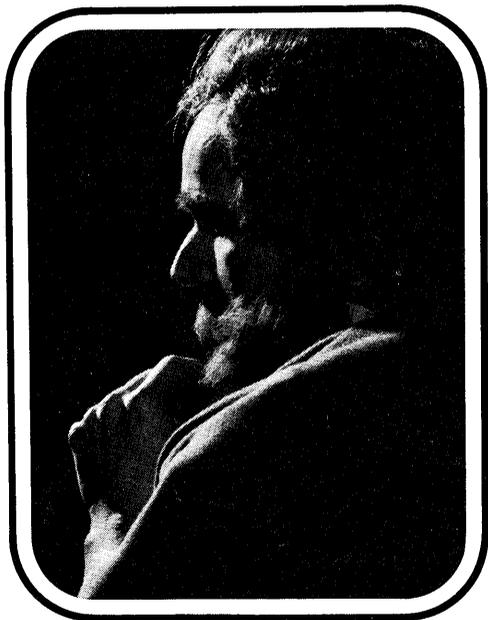
エホハナンの遺骨出土が持つもうひとつの意味は、新約聖書に一致する。新約聖書では3人の十字架の処刑は、安息日の始まりを告げる日没前にこのいまわしい作業を終えて欲しいというユダヤ人の要求で幕を閉じている。そこに配備されていた兵隊たちはイエスがすでに死んでいるのを見た。しかしふたりの盗賊の場合は足を折って確実に死ぬようにした。これは普通十字架の時に併行して行なわれたローマの刑罰であった。エホハナンも同じ目にあっていた。というのはハース博士によれば、残っていた3本の脛骨が、生きているうちに受けた骨折に特有の形で斜めに折れていたからである。

新約聖書に記されているイエスの十字架に関する描写が、皆既知の古代の処刑方法によって弁護されているのは見事である。今や考古学がこの件について発言し、新約聖書の歴史が確実なものであることを鮮明に確認している。上記のような証拠について筆をおくに当たり、数多くの記事が十字架の刑は厳格に決まった様式で行なわれたという印象を誤って与えがちであるが、そう考えない方が賢明であることを付記したい。人間的な考えから見てもイエスは一緒に処刑されたふたりよりも手ひどい扱いを受けたと予想することができる。なぜならふたりよりも先に息を引きとったからである。古代の十字架の刑の研究は単なる歴史や考古学の研究以上のものである。というのはこの主題について研究し、主が人々のためになしたもうたことを一瞥した者は、だれでも深い感謝を覚えずにはおられないからである。

（リチャード・ロイド・アンダーソン博士はブリガム・ヤング大学で歴史と古代の聖典を担当する教授であり、プロボユタ・シャロンイーストステーク部プレゼントビュー第一ワード部に所属している。）

予言者であり 族長であった 父リーハイ

マーシャル・R・クレイグ



モルモン経はリーハイに始まる。エルサレム滅亡の示現と、家族を率いての荒野の旅、そしてアメリカへの航海。しかし、息子のニューファイが記述したものであるために、父リーハイが予言者として、また族長として神に導かれたあの脱出行での大きな役割は見落とされがちである。ニューファイは自分自身の行ないや「統治や教務」については記している（Iニューファイ10：1）。しかし、モルモン経の大叙事詩の幕を上げた人物リーハイの影は薄く、その人柄についてはニューファイやヤコブ、その他モルモン経の主だった登場人物たちよりもずっとおぼろげである。

リーハイは偉大な予言者である。神から与えられた使命を果たすに当たって彼の得た経験は、他の予言者たちのそ

れに対当する。私たちが理想の予言者に求める献身と主のみ旨に従う率直さと主の命令を守る決意の堅さは、そのままリーハイの姿である。リーハイは熱心に祈った結果、示現の内に火の柱を見て、劇的に予言者に召された。彼はゼパニヤやエレミヤのような、自国民に対する予言者であった。また、旧約の多くの予言者のように、メシヤの来臨を予言した。彼は人々から拒まれ、命が危険にさらされ、アブラハムやモーセのように故国を去って新しい国を築いた。

しかし、リーハイは予言者の「典型」以上の人物である。情報が少なく部分的ではあるが、彼の人柄を知ることができる。リーハイ自身、そのひとつの手がかりを与えている。サライアが息子たちは「荒野の中で死んでしまった」と思い、リーハイを「幻に耽る人」だと言って責めた時、リーハイはそれに反駁せず、「私は私が幻を見る者であることをよく承知している。もしも私が示現の中で神の爲したもうことを見なかったなら、私は神の恵みを知らずにエルサレムに踏み留り、私の兄弟たちと一しょに亡びてしまったであろう」と言った。

リーハイの人生は夢と示現により絶えず導かれていた。彼は示現を通して主に召され、示現の中でキリストと十二使徒を見た（Iニューファイ1：6-14）。また後に、バビロン捕囚とメシヤのみ業と、異邦人に福音が説かれることを予言した（Iニューファイ10：3-14）。さらにリーハイは夢の中で、荒野に旅立つよう命じられた（Iニューファイ2：1-3）。また別の夢では、息子たちをエルサレムへ行かせてレーバンの真ちゅう板を取って来るように、そして後にはイシメルとその息子、娘を同行するように命じられている（Iニューファイ3：2-4, 7：1-2）。

リーハイは夢と示現を区別していない。生命の木について記録した初めに、「ごらん、私は一つの夢を見た。別の言葉で言えば示現を受けた」（Iニューファイ8：2）と言っている。彼は本当に「幻に耽る人」である。

リーハイの時代の予言者で旧約聖書に名前を出て来ないのは、彼ひとりではなかった。ニューファイは、父が召される前に「多くの予言者が現われてエルサレムの民に向い、お前たちは悔い改めなければならない、さもなければ大きな都のエルサレムは亡びてしまうにちがいないと予言をした」（Iニューファイ1：4）と記している。この予言者たちは、人々が「あざけり」、「その言葉を軽んじ」、「ののしった」と聖書の中で言われている神の使いの仲間である。（歴代志下36：15-16）。目前の状況を越えて国の滅亡を見る予言者は、国民に人気があったためしはない。そしてほとんどの場合、残念なことにまるで無視される。

当時、主の言葉を告げた予言者たちの大半は、ユダヤ人と共に捕らわれて行くか、あるいはバビロニア人に迎えられるか、そのどちらかであった。しかしリーハイは、エルサレムに予言者としてとどまり、主からそこを立ち去るように言われた。リーハイがうろたえなかったのは目に見えている。彼が頼りとするのは主ただひとりであった。彼は危険な大仕事から、もっと危険な大仕事に方向を転じた。

もはや国を変える仕事は終わり、今やひとつの国を作る仕事、主のために義しい国民を興す仕事に取り組むことになったのである。

リーハイにとって家族は常に大切であった。それが今や、自分の子供と子孫にすべてを注ぐことが彼の召しとなり、すべてを賭けて果たす使命となったのである。

そしてにわかには、族長の役割と予言者の役割とがひとつになった。息子にレーバンの真ちゅう版を取りに行かせるように命じられたのは彼の子孫のためであり（Ⅰニューファイ 5：19）、イシメルの家族を旅に同行させたのは、義しい子孫の母となる者が必要だったからである（Ⅰニューファイ 7：1-2）。また、生涯の終りに、エルサレムが崩壊したことを示現で知ったが、彼はあれほど愛し、働いた町を嘆くこともなく、子供たちに向かって、「今や約束の地を手に入れている。これはまことにあらゆるほかの土地に勝って優れた土地であって」（Ⅱニューファイ 1：5）と語っている。彼は自分の家族に対する予言者であり、そのことに満足していた（Ⅱニューファイ 1：14-15）。

「幻に耽る人」と言うと、決断力や強さや指導力を要する仕事には不向きな夢想家といったひ弱な印象を与える。しかし、リーハイの見た夢は白昼夢ではなかった。それは、すべての点で主に従う信仰と力を持った少数の人にしか与えられない主のみ言葉であった。内紛する家族を率いて荒野を旅することなど、ひ弱な者にできるはずがない。ニューファイは、自分がいかに主に近くあっても、家族の行く先についてはリーハイに啓示が与えられることを記録している。「夜になって主の御声が私の父に聞え、そのあくる日に荒野へ旅をつづけよと命じたもうた」（Ⅰニューファイ 16：9） 旅の途中を導いた「珍しい細工の円い球」は、リーハイの天幕の入口にあった（Ⅰニューファイ 16：10）。ニューファイが自分の弓を折ってしまい、一行が生き延びることのできるように別の弓を作った時も、彼は父親のところへ行き、どこへ行けば獲物を得ることができるか尋ねている（Ⅰニューファイ 16：23-26, 30-31）。主はニューファイに船を造るように命じられたが（Ⅰニューファイ 17：8）、乗船して船出をせよという指示を受けたのはリーハイである（Ⅰニューファイ 18：5）。

リーハイは義しい人であったため、ニューファイに主導権が移って行くのを憤りもせず、むしろ自分の息子が主に忠実に従うのを喜んでいた。「父母は年もすでにとり、その子供らのために大そう悲しい目に逢ったのでとうとう病の床に倒れた。……ほとんどこの世を去ってかれらの神と顔を合わせんばかりとなった」（Ⅰニューファイ 18：17-18）時に、ニューファイは父親から全幅の信頼を寄せられた。リーハイにとって、信仰深い息子が途中から船を導いて約束の地へ向かうのを見るのは大きな慰めであったに違いない。また、ニューファイが風を止め、嵐を鎮めるのを見た時に、主が次代の指導者を備えられたことを知ったに違いない（Ⅰニューファイ 18：21-22）。リーハイは他の息子たちをこう諭している。「もうこれから汝らの兄弟（ニューファイ）

に背くな。……ニューファイはお前たちを支配する力や権威を得ようとはせずに、かえて神の栄光とお前たち自身の永遠のさいわいとを求めている……彼はまたお前たちに従わねばならぬとさえ命じたが、これまでに神の権力を彼がもつのは実に必要なことであった」（Ⅱニューファイ 1：24-25, 27）

ニューファイが除々に指導を受け継いでいった間も、リーハイが死ぬまで族長であることに変わりにはなかった。不和や争いが度々起こったが、リーハイの生前に家族が分裂することはなかった（Ⅱニューファイ 4：12-13, 5：5）。

リーハイはアブラハム、イサク、ヤコブのように、自分の子孫にだけ知られた予言者であった。しかし、その影響は子孫を通じて何千年もの間国々に及んできた。彼が子孫に語った言葉の中には、私たちに告げる言葉もある。「主は『汝らわが命令を守らば地に栄ゆべし。されど、汝らわが命令を守らずば、わが前より追い出さるべし』と仰せになった。」（Ⅱニューファイ 1：20） また彼は進歩の基本原則を、「すべての物事には必ずその反対のものがなければならぬからである」（Ⅱニューファイ 2：11）と説明し、この原則を人類の墮落にあてはめて言った。「もしもアダムが罪を犯さなかったならば、彼は墮落をせずにそのままエデンの園にいたであろう。…… また、アダムとイブは子供をもうけることもなかったであろうし、それから不幸を知らないから喜びもなく、罪を知らないから善もなさず、そのまま罪が無い状態に留ったであろう。」（Ⅱニューファイ 2：22-23）

リーハイは偉大な人であった。それは、富や権力や才能にではなく完全に主に頼ったからである。初めて示現を見た時から終生、リーハイはその信頼を行動に表わしている。人生の最大の喜びが神のみ業にあった彼は、こう叫ぶのである。「主なる全能の神よ、汝の御業はいかにも偉大で驚嘆すべきことばかりである。汝の御座は高く天にあって、汝の御力と恵みと憐みとはあまぬく世界の全住民に及んでいる。汝は憐み深い方であるから、御許にくる者が亡びるのをゆるしたまわぬ」（Ⅰニューファイ 1：14）

リーハイは主に従うことで一生の間に何度も苦勞を味わったが、しかし、彼よりも成功と満足を取めたとされる大勢の人々より、もっと大きな報いを得ている。彼は死ぬ直前にこう語った。「しかしごらん、主は私を地獄から贖いたもうた。私は主の栄光を見ていつまでもその慈愛の御腕に抱かれている。」（Ⅱニューファイ 1：15） リーハイは、夢を見せて下さった御方がやがては自分に永遠の生命を与えて下さり、そこで自分に従った家族と共に神の愛の白い実をとこしえに味わうことができると知っていたので、生涯主の示現に従って生きたのであった（Ⅰニューファイ 8：11, 13, 16；11：21-22）。

（マーシャル・R・クレイグ プリガム・ヤング大学英語学教授、スプリングビル・ユタ・コロブステーキ部高等評議員）

万能の人 ニーファイ

アレン・E・バージン

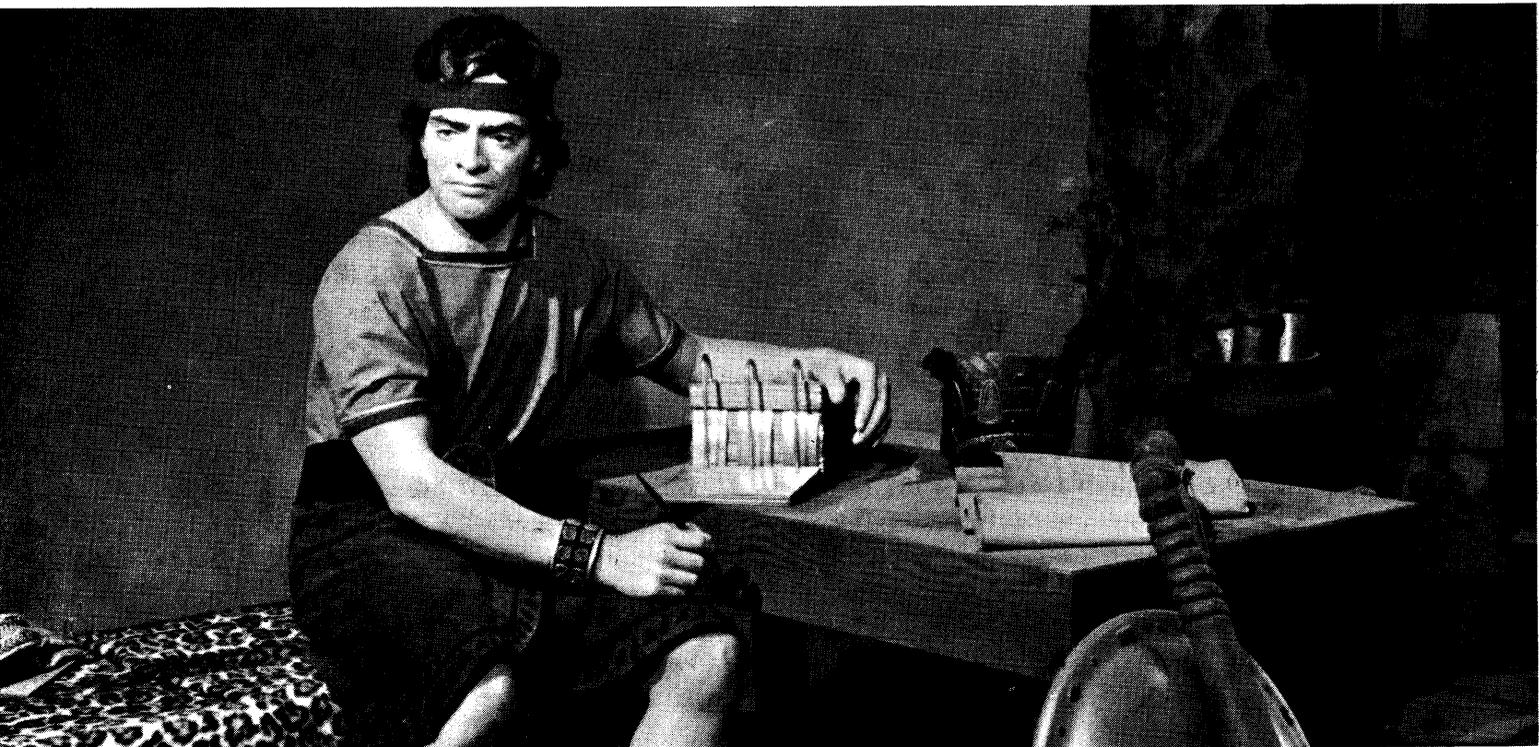
ニーファイは大予言者であると同時に建国者でもある類まれな人物であった。予言者としては、古代アメリカで霊の指導者として父リーハイの後を継ぎ、後年ニーファイ人が築き上げた正義の隆盛の基礎を据えた。また、新生国家の統治者としては、国民から非常に愛された。その結果、ニーファイが「油をそそいでその民の王としその統治者とした」後継者を、民は「ニーファイ二世、ニーファイ三世」……と呼ぶことにしたほどである（モルモン経ヤコブ1：9-11）。さらに、彼の影響力は非常に大きく、その後1千年間、民はニーファイ人と自称した。その1千年の終わり近くに、モルモンは誇りをもって自分をニーファイの子孫と呼んでいる（モルモン1：5）。

エノクやモーセ、ジョセフ・スミス、ブリガム・ヤングのように、ニーファイは自分の民の安全を求め、新しい共同社会を組織し、聖典の歴史の中で独特な時代の先達となった。彼はエノクやモーセやジョセフ・スミスと同じよう

に、雄大な示現を見、大きな霊の力を受け、主の訪れも受けた（Iニーファイ2：16；IIニーファイ11：2-3）。また、イスラエルの息子ヨセフのように、義しき故に兄たちの反感を買って殺されそうになった（創世37：18-20；Iニーファイ7：16，16：38；IIニーファイ5：4参照）。しかしニーファイは、神の予言者の例外にもれず、指示されるまま、勇気をもって主のみ旨を行なったのである。

人となり

私たちはニーファイの霊性の高さを承知している反面、彼が多様な才能と技術を持った世界的な「万能の人間」であったことは忘れがちである。彼は「新しい」世界で大文明の基礎を築いた（IIニーファイ5：6，10-11，13）。その知性と技術と見識と指導力は、古今東西の大開拓者の中間に位する。普通は彼を「開拓者」とは呼ばないが、そう呼



んでしかるべきである。その点から見ると、彼が自分の記した記録の中で幾度か自分をモーセにひき比べているのに気づく（I ニーファイ 4 : 2, 17 : 23-47）。この対比は実にぴったりだと思ふ。どちらも偉大な植民者であり、霊的な力に秀でている。また示現を見、自国はもちろん他国にまでも大きな影響を及ぼす記録をつづっている。

ニーファイは自分で鉱石を精錬し、型を取って、自分の使う金属板を作った。彼は、様々な分野において熟練の名工であった（I ニーファイ 19 : 1）。はがねの弓が折れると、木の弓を作った（I ニーファイ 16 : 23）。主の教えを受け、鉱石を鑄造して道具を作り、「非常に立派な」作りの船も建造した（I ニーファイ 17 : 16, 18 : 1-4）。約束の地では町を築き、「ソロモンの神殿にならって」神殿を建立し、民に建築を教え、木材、鉄、銅、真ちゅう、鋼、金、銀、その他の貴金属を使った細工を教えた（II ニーファイ 5 : 15-16）。また、レーバンの剣を型どって防衛のための武器を作った（II ニーファイ 5 : 14）。そして、レーマン人が狩猟に依存する「怠け者の民」となった土地では、自分の民に手を使って勤勉に働かせた（II ニーファイ 5 : 17, 24）。彼はこのようなことを皆、全くの荒野で、文明の手を何も借りずに成し遂げたのである。

ニーファイの顔かたちは知らないが、背は高くて力は強く（I ニーファイ 4 : 31）、卓越した狩人で（I ニーファイ 16 : 31-32）、苦痛や苦難に不平をもらさない人であったことがわかる。また、練達の勇者として民の「大きな保護者」となり、「レーバンの剣をふるって」人民を守った。（モルモン経ヤコブ 1 : 10）

アベルの義しさがカインの憎悪をそそったように、ニーファイの義しさがレーマンやレミュエルの憎しみを買った。

ニーファイの純粋さや彼に注がれる父の愛情、主に近い生活が、レーマンとレミュエルに劣等感を抱かせ、絶えずいらだちの種となったに違いない。それでもふたりは時々謙遜になった。天使に諭され（I ニーファイ 3 : 29）、あるいはイシメルの妻子にとりなされ（I ニーファイ 7 : 19-20）、またリアホナに記された主のみ言葉を読み（I ニーファイ 16 : 27）、神のみ声と力により（I ニーファイ 16 : 39 ; 17 : 54-55）、ついには海上の嵐によって（I ニーファイ 18 : 13-16）。しかし彼らはそれをすぐに忘れた。彼らの謙遜さは高慢な気持を制するほどに強いものではなかった。「悔い改める」より早く次の反抗心が起こるのであった。

だれでもそうであるが、レーマンとレミュエルも前世で身につけた固有の性質を持って生まれてきた。従って、彼らの行動をただニーファイに対するライバル意識として片づけるわけにはゆかない。また、ニーファイの一徹さを見たたちに対する独善や尊夫さと解釈することもできない。ニーファイは齒に衣を着せず、「あなたたちは心の中で人殺しをした……あなたたちは悪事をするのは早いけれども、あなたたちの神である主を思い起すのはおそい」（I ニーファイ 17 : 44-45）と言って兄たちを責めた。争いは大がかりになってくる。それは実に人の姿を借りた正邪の闘い

である。対立するものがここでは拡大されて、違いがはっきりと浮彫りにされている。思うに、ニーファイはこの対立を、全人類への教訓として詳細に書き残すように靈感を受けていたのであろう。

ニーファイにはもうひとつ、私を引きつけてやまない徳がある。彼は兄たちに対して心を閉ざさなかった。つまり、恨みを抱かず、けん責し勧告した後には愛を示している。兄たちにイエス・キリストの福音を勧めて拒まれた時の彼の悲しみが、私たちにひしひしと伝わってくる。「私は兄たちのしたことを真心から許して」（I ニーファイ 7 : 21）と若い頃の事を語り、また後年「昼はたえず私の民のために祈り、また夜は私の民のことを心配して涙で枕をぬらして」（II ニーファイ 33 : 3）と書いている。

ニーファイが若い内から父親に全く従順であったことは、現代の父親と息子たちに示唆を与える。ニーファイは族長としての父親の役割については、自らの分を万事わきまえていた。父親の言うことはすべて信じ、靈感を受けて事をなそうとする時には前もって父親の指示を仰いでいる。また同時に、リーハイはニーファイに一目置き、敬意さえ払って、息子の真の偉大さを認めている。ここに、父と息子のあるべき姿を見るのである。何百年たっても少しも色があせず、多くの家庭で愛と権威が失墜しているこの現代にはかえって似つかわしい標準を。

霊 性

ニーファイが非凡な霊的資質を具えていたことは、彼が受けた賜と教えと力とを見れば一目瞭然である。彼はジョセフ・スミスと同じように「大そう若かった」（I ニーファイ 2 : 16-22）頃から霊的な知識を得て、自分の将来を知らされていた。また予言者ジョセフのように、「神の奥義をしきりに知りたいと願っていたから心から主に向って祈った」（I ニーファイ 2 : 16）その結果、主が実際にニーファイを訪れて、「汝を……約束の地に導くべし。……汝は兄弟たちの支配者にされまた兄弟たちの教師になるべし」（I ニーファイ 2 : 20, 22）と告げられた。ニーファイはレーバンの真ちゅう版を手に入れる前から、自分の神聖な召しを知っていたのである。

それから何度も啓示を受け、力を授かって、ニーファイは偉大な予言者の仲間入りをした。

「まことに私の声が上って天に届いたから、使たちが天降って私に導きと恵みとを施した。私は神の『みたま』の翼の上にわが身をのせられて非常に高い山の上に運ばれて行き、まことに大いなる物事を自分の目で見た。しかしそれは人間にとってまことに高尚に過ぎるからお前はそれらのことを書き誌してはならぬと言われた。」（II ニーファイ 4 : 24-25）

信 仰

「愛のひとかけら」

アーマ・ブランク

1930年代の初め、私が初めてパート・ブランクに会った時彼は間もなく探求生活を終えようとしていました。聖書の「求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう」(マタイ7:7)という勧めに従って、自分で祈り、その結果大きな答えを受けたのです。

パートの母親は彼が9歳の時に亡くなり、宗教嫌いの無信論者だった父親は説教師を銃で追い払うほどでした。大勢の子供たちは宗教教育はおろか、道徳教育もほとんど受けませんでした。酒やタバコや汚い言葉は日常のことでした。

ところが、大人になって家を離れ、世の中に出たパートは、心の渇きを覚え始めました。彼は神がいるかどうかを知りたいとしきりに思いました。また、もしいるならば、どのような神なのだろうかと考えました。

彼はいろいろな教会に行き、聖書も読み始めました。マタイ伝のあの言葉をきっかけに、自分を見つめ、少年だったジョセフ・スミスと同じように真理を知りたいと切望して、生まれて初めて祈りを捧げました。「神様、本当にいらっしゃるなら、それを教えて下さい。何でもおっしゃる通りのことをしたいと思えます。」こうしてひざまずいた時に、「全くの平安に包まれ、心が燃えて、それまで感じたことのない喜びが心にあふれた。自分がとてつもない霊的存在にどっぷりつかっているような感じだった」と言っています。

その感じは3日間続いて、彼が言うには、その間中、「地が足についているという感じがまるでなかった。神の清らかな愛が自分をすっぽり包んでいるようで、それは素晴らしかった。その間の私は、何もかも愛することができた。子供を気にかけて大きな愛が心からあふれた。雨が嫌いだったのに、ずぶ濡れになることが心地良かった。それが日の光栄の王国に満ちている神の愛のひとかけらだとしたら、小羊とライオンが一緒に伏していても少しも不思議ではない。」

3日してからその素晴らしい歓喜は去りました。彼は世の中で一番大切な物を失った気持でした。彼は苦悩の中からもう一度あの喜びを与えて下さいと神に祈りましたが、何事も起こりませんでした。しかし、以前とは大きく違ったことがありました。それは、神がおられることを知ったことです。彼は神の存在を知りました。実際に神の愛と力を感じたからです。神は心からの祈りに答えて下さることを知りました。自分の祈りが実際に答えられたからです。

それから、探求が始まりました。彼は、神が自分に望んでおられることがわかったならばどんなことでもすると約束したのです。彼はそれを守ろうと思いました。真理にかなった生活を送ろうと決心した彼が最初に感じたことは、自分が生活を変えることを神が望んでおられるということでした。そこでタバコと酒をやめ、そのほかの欠点も直そうと努めました。

それから、神は自分に真理を勉強するように望んでおられる

に違いないと思いました。そこで聖書の勉強を始めました。次いでコーランを読み、また釈迦や孔子、その他の宗教家の本も読みました。公立図書館の宗教の棚が彼の教室になりました。真理の知識を得るまで、心は休まりませんでした。

「プロテスタントの牧師さんが誠実な人で、ほくにバプテスマを施したがっていた。」パートは当時のことをこう述懐しています。「でもほくはおかしな返事をしていたんだ。あなたには権能がないから、ほくにバプテスマを施しても何にもなりませんって。どうしてそう感じたのかわからないけど、確かにそうだとはっきりわかってたんだ。」

ここで、パートはワシントン州のレイモンドに引っ越すことになり、レイモンドでも多くの教会を見てまわることを忘れませんでした。彼は牧師さんたちにこんな質問をするようになりました。「神様はどんな御方ですか。説明して下さい。通りを歩いて来られるとしたら、それは男性の姿ですか。背の高さはどの位ですか。」

満足できる答えは得られませんでした。神に会うことはできないとか、神は通りを歩かれないとか、形はなく宇宙に満ちるものだからという答えでした。

そんなある日、お姉さんの家で「現代の光」というパンフレットが目に留まりました。それを読んだ彼は、胸を躍らせながら、お姉さんにどこでそれを手に入れたのか尋ねました。彼は言っています。「そのパンフレットを読んだ時は、何日も砂漠をさまざざのどが渇いて死にそうなところにだれかが来て、きれいな冷たい水を飲ませてくれたような気持だった。ほくにはそれが真理であることがわかった。真理に渇いて今にも死にそうなところで、真理の水をほんの少し飲んだ。もっとたくさん飲みたかった。」

パートのお姉さんは、末日聖徒イエス・キリスト教会で「支部長」とか言われているお医者さんからそのパンフレットをもらったのだと言いました。その人々は「モルモン」と呼ばれているということでした。

それから間もなく、パートは教会を紹介するパンフレット数冊とモルモン経を手に入れ、また誘いを受けました。私が夫のパート・ブランクに初めて会ったのは、そのお医者さんの診察室でした。そして次に会ったのは教会ででした。彼はすべての集会に出席しました。また、彼の鋭い質問に答えることができたように、教会員は一生懸命に勉強しました。

こうして彼は、神について説明してくれる人を捜しあてたのでした。神とイエス・キリストについてのジョセフ・スミスの説明は真理を告げていました。彼は、現実には触知できる体を持った神を理解することができました。歩くことができ、話すことができる神、顔と顔を合わせて会うことができ、前に自分が感じたあの大きな愛することのできる神。彼は長い探求の末に、バプテスマを施す権能を持った教会を見つけたことを知ったのです。そして秋のある日、冷たいウィラバ川で水に沈められた時から、彼の証は一度も揺らいだことがありません。

この偉大な人物の信仰の丈と深さを推し測るのは容易なことではない。通常性格も圧倒的な天の影響力によってかき消されるほどの強い信仰である。山の上に連れて行かれたり、指さすだけで敵に衝撃を与えたり、2,600年も先のことを見通したりすることは、私たちにとても考えられないことである。しかし、ニーファイの信仰は、よく私たちが予言者の召しについて連想する示現や声のほか、上に述べたような奇跡を生じるだけの大きな信仰であった。

主は私たちに語ることができるし、実際に語りかけて下さる。私たちがニーファイのような信仰を働かせて、同じように「へりくだった心」を持つならば、自分の問題に取り組む力がニーファイのように持てるのである。また彼のように大きな問題を抱えた人は、人類史上あまりいない。

キリストに対するニーファイの証

ニーファイは完全な信仰を働かせたばかりでなく、その信仰はイエス・キリストに対する正しい信仰であった。

私個人の意見であるが、ニーファイ第一書と第二書全体で一番強烈なのは、イエスが「永遠の神なるキリストにましまして、万国の民に現われたもう」というニーファイの不変の証である。私はもう何年も前の大学時代に、求道者としてこの大胆な証を何度も繰り返して読んだことはいきり覚えている。私は最初の頃は懐疑的で、冷やかしの気持もあり、読みながら余白に、論理や文法や思想の弱い点をいちいち書きあげて難癖をつけていたものである。しかし、そうしてニーファイ第一書の最後の33章まで来た時、私はニーファイの言葉に宿る力に啞然とした。まるで脳を貫いて、それまで筋道立てて積み上げてきた反論を切り崩されてしまったような感じであった。ニーファイの言葉の持つ影響力からは、何としても逃れられなかった。それは実際にニーファイが私を指さしてショック療法を使って心を揺さぶったように、生々しかった。彼の言葉を読み返すと、私はすっかりそのとりこになってしまった。自分の意識にかかわりなく、心地よい気持ちに心が満たされた。それがキリストの実在とその愛が身近にあることの証であり、キリストのみたまであったことを、あとで知ったのである。

悔改めの良薬を一服口にした後、私はバプテスマを受けた。こうしてバプテスマを受けて以来、あの章をそれこそ百回も読んだと思う。そこには、短い言葉の中に、55年間も主に絶対の奉仕を捧げてきた老人が書いた真実の証が完璧に語られている。

この章の一部だけを抜き出して全体の印象を捕えることはどうい無理である。従って、心を一新し、啓発するめったにない経験を自分で味わってみるよう、全読者にお勧めしたい。特に教会員でない方々、中でもレーマン人の子孫の方々にお勧めする。というのは、ニーファイが末日の示現を心にかけてながら書いていた時に、彼らのことがたいそう気になっただろうと思うからである。もしも書かれた言葉に霊的な力があるとしたら、それは正にこの箇所

である。私はイエス・キリストに関する自分の知識が、この教えによってはかり知れないほど大きくなったと思う。おかげで、あの大学時代を通じて、読書と祈りを続けて霊的に成長する準備ができた。ニーファイの書が私自身の生活、ひとりの人間の生活にもたらしてくれた感動は、なぜこの金版が刻まれ、保存され、そして出版されたか、そのわけを説明している。

万能の人

ニーファイは、ビジョンと実績においてほとんど人間をはるかにしのぐ素晴らしい人物だと思う。私には超人のようにも思える。しかし、彼が自分の弱さを嘆いた時に奥底から示された彼の人間らしさにも着目すべきである。

『ああ、私は不幸な人間である』と。まことに、私はわが肉体のために心に憂いがあり、自分の罪悪のために私の心は悲しむ。私は非常にたやすく迫ってくる誘惑と罪悪とのために取り巻かれている。(IIニーファイ4:17-18)

この嘆きの中で、ニーファイははからずも、もうひとりの自分、弱点を持った自分、彼の書のほかのどこにもない自分を見せている。この率直なところが、進歩はしたいがニーファイの完全さを見るとどうい及びもつかないとあきらめがちな私と同族の読者たちに、大きな励ましとなっている。ニーファイは彼自身の葛藤によって、私たちにも克己が可能であるという希望を与えてくれる。こう告白するということは一体どんな「罪」を犯していたのだろうと憶測する人があるだろうが、彼は罪などを犯しておらず、ただ敵に対して怒りを抱くことや困難にあってひるむのを悔やんだだけであると私は思う。極限状態でも自分を正義に従わせる彼の力を考えてみれば、彼にとっては重大なささやかな弱点も、私たちから見ればかえって大人物の感を深くするばかりである。

このように、ニーファイはほぼ完全な人間の姿を備えている。予言者であり、教師であり、統治者、開拓者、建設者、職人であり、識者、著作者、詩人、軍人指導者、建国者、息子、夫、そして人間機関車のような人であった。世人をもってはかれれば、彼は古今最大の偉人の中に入る。主の僕になるべく特に選ばれた、並ぶ者のない万能の人であった。世代を代表して他の世代のために次のような雄弁をふるった者は、史上にほとんどいない。

「さて私の愛する兄弟たちよ、またユダヤ人よ、世界の隅々に至るすべての人々よ、この言葉を聞いてキリストを信ぜよ。……この言葉はキリストの言葉であって……この言葉は善を行えとあらゆる人に教え勧めている。

私は大いなる終りの日に、私たちのすべてでなくともその多くの者が、天の御父の王国に救われるのを御許しになるよう、キリストの御名によって天の御父に祈る。……私は土の中から呼ぶ人の声のようにあなたたちに語る。あの偉いなる終りの日がくるまでさらば」(IIニーファイ33:10, 12-13)



小さな
お友だちへ



メアリー・アンはピンクの布地のしわをのびしながら言いました。「ねえ、私はもう12さいよ。復活祭のために新しい洋服がほしいわ」

お母さんはオーブンから焼き立てのパンを取り出しながらほほえみました。

「すてきなができると思うわ。よくお母さんの言うことを

ピンクの洋服

ドーラ・D・フラック



聞いてくれるから」

そして、お母さんは、湯気のたったパンをふきんで包み、「これをつぶさないようにフィッチさんに届けてくれない？」とたのみました。

「マーサの家に行くのは気がすすまないわ。どう話しかけていいのかわからないんですもの」
メアリー・アンは答えました。



お母さんはため息をつきました。「マーサは友だちをほしがっているのよ。マーサと親しくしてあげる子はだれもないじゃないの。」

「これ全部持って行くの。私たちの夕食の分はとっておかないの。」

「メアリー・アン、フィッチ姉妹は病気なのよ。それにマーサはまだパンの作り方を知らないでしょうし、さっそく教えてあげなければ。」お母さんはひとりごとのようにこう言いました。「マーサがお母さん代わりをしなければならなくなるわ。」

「それじゃ、マーサのお母さんはよくなるなんて言うの。」メアリー・アンが口をはさみました。

「おそろくね。そのことはマーサも知っていると思うのよ。マーサが人と話したがるはないのはそのせいでしょう。さあ、急いで。暗くならないうちに帰って来てちょうだい。」

メアリー・アンは小石をけりながら通りを歩いて行きました。そして「私にできるのは台所から何かを人に届けることぐらい。

でも私がいなかったらお母さんは扶助協会の会長の責任を果たせないと思うわ」と、自分をなぐさめました。

そんなメアリー・アンの気持がわかったかのように、すずめが1羽へいの柱の上でさえずっていました。木々は春のかおりをただよわせていました。次の日曜日は復活祭だわ、新しい洋服を着て行かなくちゃ。そのとき、ふとマーサのことが頭に浮かび、心が重くなりました。

玄関にあらわれたマーサは泣き顔をしていました。

「これお母さんからです」と言って、メアリー・アンはパンをテーブルの上に置きました。

マーサはおいしそうなおいをかぎながら、喜んで言いました。「あなたのお母さんは私たちに必要なものがいつもわかるのね。」

「あなたにパンの作り方を教えなくちゃって言っていたわ。」メアリー・アンはできるだけ親しそうに言いました。「ほかに何か食べるんでしょう？」

「ええ、じゃがいもと玉ねぎのスープよ。じょうずに作れな

いけれど、練習しているの。」マーサはおどおどしたようすで言いました。

そのとき、おくから声が聞こえました。「お母さんが呼んでいるわ。今日はどうもありがとう。」マーサはそう言っておくへ行ってしまいました。

次の日、お母さんは復活祭のときの洋服をせっせとぬって来ていましたが、メアリー・アンの心はずんでいました。「さあ、着てみてちょうだい。」

お母さんにそう言われて、メアリー・アンは部屋に入って洋服に手を通しました。そのときです。「お母さん、フィッチ兄弟が来たわよ」という妹の声が聞こえました。

お母さんが出て行った後、メアリー・アンは鏡にうつった自分の姿をながめました。えりに白いレースをつけ、こしにピンクのリボンを結んでみました。何てすてきなドレスでしょう。

お母さんが、片手でエプロンを取り、もう一方の手でかみのけをかきわけながら言いました。

「さあ、洋服をぬいで。フィッチ姉妹のぐあいが悪くなったの。」

これから出かけてくるわ。こんばんは帰れないかもしれないわね。」

次の朝はリサが食事の用意をしてくれました。お父さんに送ってもらって学校に行きましたが、マーサはお休みでした。メアリー・アンはとても気になりました。

家に帰ると、お母さんはミシンの前にすわっていました。台所からはおいしそうな夕食のにおいがしてきます。

「着てごらんさい。ちょうどいいかどうか見てみましょう。でも、日曜までにできるかな。」そう言ってお母さんは静かに言いました。「フィッチ姉妹がけ

さなくなったのよ。姉妹の埋葬衣を作らなければならないの。」

「そうだったの。だからマーサは学校に来なかったのね。」メアリー・アンは泣き出しました。

その夜、メアリー・アンは自分でえりとそで口にていねいにレースをつけました。そのそばでは、お母さんが白い布を広げて埋葬衣をぬっていました。

「葬儀はあさってよ。マーサの服はグレーのが一番いい服だったわね。時間と布があれば新しいのを作ってあげられるのに。」

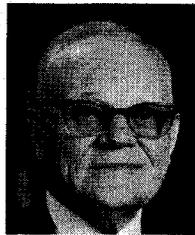
メアリー・アンはピンクの洋服を持ち上げ、レースのぐあいを調べました。そして何やら考

えていましたが、決心したようにこう言いました。「お母さん、この洋服、マーサにあげようと思うの。私はあの白い洋服にこのレースをつけるわ、そしたらすてきに見えるでしょう。」

そうは言ったものの、メアリー・アンはのどをつまらせながら、そのピンクの洋服にレースをぬいつけていました。

すてきなピンクのドレスは悲しみにしずんでいるマーサの顔によくはえました。メアリー・アンはお母さんにこうささやきました。「ドレスのことはもういいの。だって、新しい友だちができたんですもの。」





復活祭は、御
子イエス・キリ
ストがお生まれ
になったこと、

そして私たちのために死んでく
ださったことを祈りの気持をも
って、天のお父様に感謝すると
きてです。

マリオン・G・ロムニー第二
副管長が、救い主が生きていら
っしゃること、また救い主の教
えに従うことのたいせつさにつ
いてお話しています。



私たちが皆さんにお伝えした
いこと、それは、今の時代はイ
エス様の福音が伝えられる最後
の時代であるということです。

このたいせつな時代に、神様は
天を開かれました。直接その姿
を現わされて、福音を回復し、
教会をおたてになりました。そ
して福音を伝え、救いに必要な
儀式を行なう力をお与えになっ
たのです。神様は人々に祝福と
救いを与えようと、今も啓示に
よって導いてくださっています。



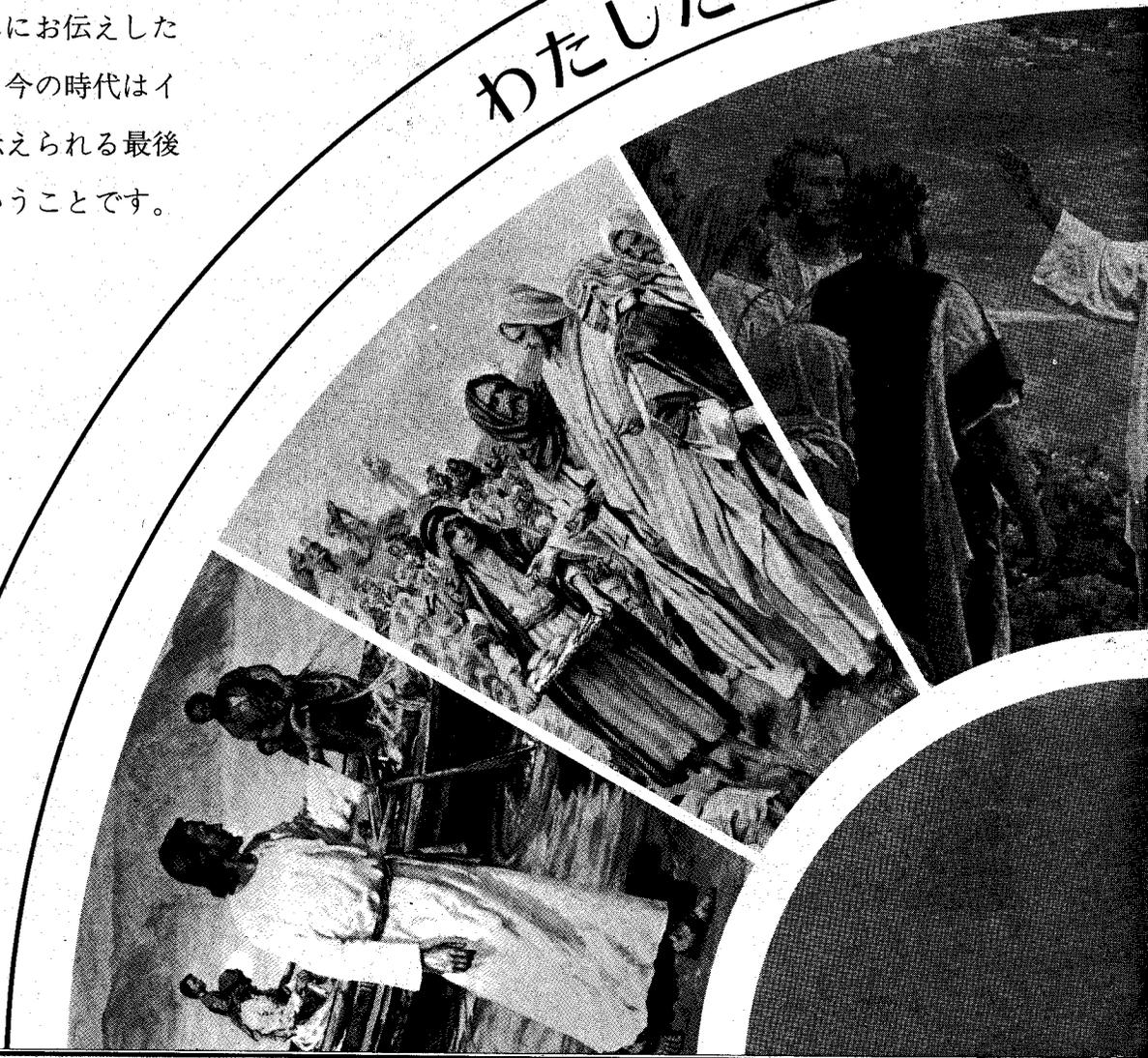
私たちはことばと行ないによ
って、世の人々に福音を伝え、
問題を解決するときの主の方法

を教えて、彼らが主に頼って生
活できるようにはげまされなけれ
ばなりません。



イエス様はその力をいろいろ
なことに使われました。病人を
いやしたり、足なえを立たせた
り、盲人の目を開かせたりしま
した。また悪霊を追い出したり、
死人を生きかえらせたりもしま
した。水をぶどう酒に変え、い

わたしたちの主、あが



ちじくの木をのろい、あらしを
静め、水の上を歩いたりもしま
した。4、5千もの群衆に食物を
与えたり、魚の口から銀貨を取
り出して、それを宮の納入金と
しておさめたりもしました。

◇

◇

イエス様はあかしを得る方法
を教えてください。ユダヤ人の仮
庵いほの祭りのとき、イエス様が宮
で教えているのを見たユダヤ人

たちは、その教えにおどろいて、
こう言いました。

『この人は学問をしたことも
ないのに、どうして律法の知識
をもっているのだろう。』そこ
でイエスは彼らに答えて言われ
た、「わたしの教はわたし自身
の教ではなく、わたしをつかわ
されたかたの教である。」(ヨハ
ネ7：15-16)

◇

◇

末日聖徒イエス・キリスト教
は、地上の神の王国です。な

にもものこの教会の発展をさま
たげることはできません。モロ
ナイはこう言っています。「主
の誓約がことごとく果されるま
で、主の永遠のみこころは必ず
つずけて行われる」(モルモン
8：22)

◇

◇

忘れないでください。神様は
生きておられ、私たちは神の子
です。神様は人に不死不滅と永
遠の生命を授けたいと願ってお
られます。神様の知識とわざを
大海にたとえれば、私たちがこ
れまで学び行なってきたこと、
これからそうすること、これら
すべてをあわせても、わずか1
てきの水にすぎません。このこ
とをよく心にとめておいてくだ
さい。

ない主イエス・キリスト





ジェフは、コロンビアで伝道しているお兄さんのように、宣教師になりたいと思っていました。でも、人に話しかけるのがこわいのにな、どうして伝道することができるでしょう。

先週のプライマリーで、会長さんがこう言いました。「みんなは宣教師ですから、お友だちをプライマリーに連れてきてくだ

さい」ジェフはそのとき、手をあげて約束してしまったのです。ところがあとになって、こまってしまう。「学校で友だちに教会のことをどう話したらいいのだろう。」ジェフと同じ年で末日聖徒の男の子は、学校にはふたりしかいません。ふたりともプライマリーでは、開拓者のクラスです。そして開拓者の先生が大好きです。ジェフが手をあげたのは、先生を喜ばせたかったこともあるのです。

ジェフは、聖餐会でふたりの宣教師が、人々に福音を伝えたときのすばらしい気持についてお話をしていたのを思い出しました。そして、自分も同じ気持を味わいたいと思いました。けどこんなにおく病では。

ジェフはしょんぼりしながら台所に入り、こしをおろしました。そこではお母さんがクレヨンでタオルにかざりをつけていました。「お母さん、そのクレヨン、洗っても落ちないの？」ジェフは言いました。

「落ちないわよ。特別なクレヨンだから。」

「それはいいね。どんなものでも書けるの。」

「書けるわよ。なんだかうれしそうね。」

ジェフは自分の部屋に行くと、黄色のTシャツを持ってきました。そして、きれいにしわをのばしてから、黒のクレヨンでTシャツの胸に大きなスマイルの顔をかき、その下に「楽しいプライマリー」とかき加えました。



の宣教師

それがかわくと、こんどは背中に、大きく、「プライマリーって知ってる？もっと知りたい？」とかきました。次の日は学校で特別活動の時間がありました。そこでジェフは、このTシャツを着ていくことにしました。上着かけのところには、もう何人かの友だちが集まっていた。ジェフが上着をぬぐと、ひとりがジェフのTシャツの胸の大きな顔と背中の字に気づきました。

「何てかいてあるんだい、ジェフ」アンディーがききました。

ジェフは、からかわれるのかなとびくびくしていました。

アンディーは大きな声で「プライマリー」と読み、「プライマリーって何だい」ときいてきました。

ジェフはほっとしました。そして心で祈りながら、「プライマリーではね……」とおそるおそる話し出したのです。

するとクレイグが口をはさみました。「ジェフ、プライマリーって、スカウトやなにかを勉強するところだろう。この間言ったじゃないか。」

「スカウト？ぼくのお父さんもボーイスカウトだったよ。ぼくにもなりなさいって言うんだ。一緒にプライマリーに行ってもいい？ジェフ」アンディーが言いました。

ジェフが答えようとする、クレイグも「ぼくも行きたいな」と言ってきたのです。

ジェフは信じられませんでした。「プライ

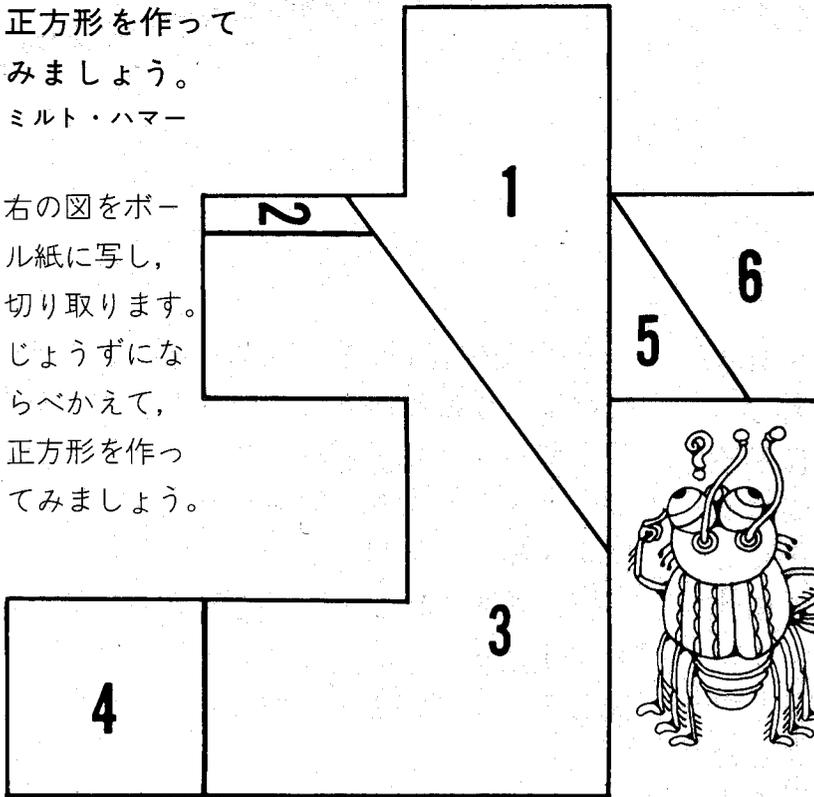
マリーのみんながこのシャツを着て学校に行けば、みんながプライマリーのことを知りたがる。そしたらぼくたちのプライマリーはどんどん大きくなるだろうな。」ジェフはこう思いました。

はにかみやのジェフでも宣教師になれたのです。そしてジェフはあの宣教師たちと同じような気持ちを感じ始めていたのです。



正方形を作って
みましょう。
ミルト・ハマー

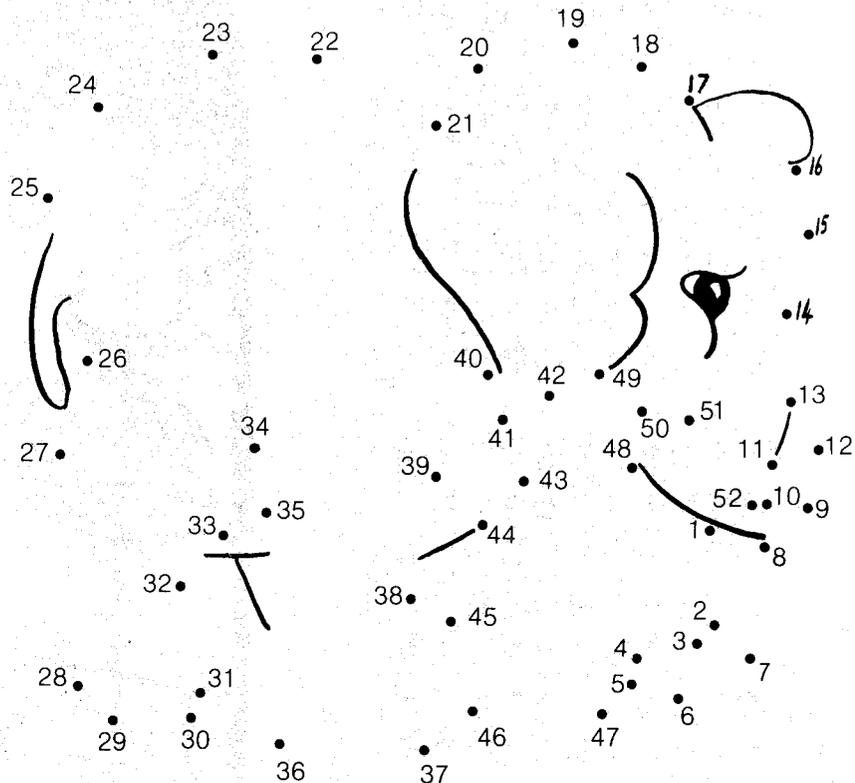
右の図をボー
ル紙に写し、
切り取ります。
じょうずにな
らべかえて、
正方形を作っ
てみましょう。



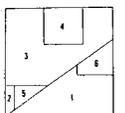
さあ、頂上を
めざして出発！
ロバータ・フェアラル



おもちゃばこ



正方形の
作り方



点をむすんで
みましょう。

「愛のひとかけら」

アーマ・ブランク

1930年代の初め、私が初めてバート・ブランクに会った時彼は間もなく探求生活を終えようとしていました。聖書の「求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう」(マタイ7:7)という勧めに従って、自分で祈り、その結果大きな答えを受けたのです。

バートの母親は彼が9歳の時に亡くなり、宗教嫌いの無信論者だった父親は説教師を銃で追い払うほどでした。大勢の子供たちは宗教教育はおろか、道徳教育もほとんど受けませんでした。酒やタバコや汚ない言葉は日常のことでした。

ところが、大人になって家を離れ、世の中に出たバートは、心の渇きを覚え始めました。彼は神がいるかどうかを知りたいとしきりに思いました。また、もしいるならば、どのような神なのだろうかと考えました。

彼はいろいろな教会に行き、聖書も読み始めました。マタイ伝のあの言葉をきっかけに、自分を見つめ、少年だったジョセフ・スミスと同じように真理を知りたいと切望して、生まれて初めて祈りを捧げました。「神様、本当にいらっしゃるなら、それを教えて下さい。何でもおっしゃる通りのことをしたいと思います。」こうしてひざまずいた時に、「全くの平安に包まれ、心が燃えて、それまで感じたことのない喜びが心にあふれた。自分がとてつもない霊的存在にどっぷりつかっているような感じだった」と言っています。

その感じは3日間続いて、彼が言うには、その間中、「地が足についているという感じがまるでなかった。神の清らかな愛が自分をすっぽり包んでいるようで、それは素晴らしかった。その間の私は、何もかも愛することができた。子供を気にかけて大きな愛が心からあふれた。雨が嫌いだったのに、ずぶ濡れになることが心地良かった。それが日の光栄の王国に満ちている神の愛のひとかけらだとしたら、小羊とライオンが一緒に伏していても少しも不思議ではない。」

3日してからその素晴らしい歓喜は去りました。彼は世の中で一番大切な物を失った気持でした。彼は苦悩の中からもう一度あの喜びを与えて下さいと神に祈りましたが、何事も起こりませんでした。しかし、以前とは大きく違ったことがありました。それは、神がおられることを知ったことです。彼は神の実在を知りました。実際に神の愛と力を感じたからです。神は心からの祈りに答えて下さることを知りました。自分の祈りが実際に答えられたからです。

それから、探求が始まりました。彼は、神が自分に望んでおられることがわかったならばどんなことでもすると約束したのです。彼はそれを守ろうと思いました。真理になかった生活を送ろうと決心した彼が最初に感じたことは、自分が生活を変えることを神が望んでおられるということでした。そこでタバコと酒をやめ、そのほかの欠点も直そうと努めました。

それから、神は自分に真理を勉強するように望んでおられる

に違いないと思いました。そこで聖書の勉強を始めました。次いでコーランを読み、また釈迦や孔子、その他の宗教家の本も読みました。公立図書館の宗教の棚が彼の教室になりました。真理の知識を得るまで、心は休まりませんでした。

「プロテスタントの牧師さんが誠実な人で、ぼくにバプテスマを施したがっていた。」バートは当時のことをこう述懐しています。「でもぼくはおかしな返事をしていたんだ。あなたには権能がないから、ぼくにバプテスマを施しても何にもなりませんって。どうしてそう感じたのかわからないけど、確かにそうだとはっきりわかってたんだ。」

ここで、バートはワシントン州のレイモンドに引っ越すことになり、レイモンドでも多くの教会を見てまわることを忘れませんでした。彼は牧師さんたちにこんな質問をするようになりました。「神様はどんな御方ですか。説明して下さい。通りを歩いて来られるとしたら、それは男性の姿ですか。背の高さはどの位ですか。」

満足できる答えは得られませんでした。神に会うことはできないとか、神は通りを歩かれないとか、形はなく宇宙に満ちるものだからという答えでした。

そんなある日、お姉さんの家で「現代の光」というパンフレットが目にとまりました。それを読んだ彼は、胸を躍らせながら、お姉さんにどこでそれを手に入れたのか尋ねました。彼は言っています。「そのパンフレットを読んだ時は、何日も砂漠をさまよってのどが渇いて死にそうなところにだれかが来て、きれいな冷たい水を飲ませてくれたような気持だった。ぼくにはそれが真理であることがわかった。真理に渇いて今にも死にそうなところで、真理の水をほんの少し飲んだ。もっとたくさん飲みたかった。」

バートのお姉さんは、末日聖徒イエス・キリスト教会で「支部長」とか言われているお医者さんからそのパンフレットをもらったのだと言いました。その人々は「モルモン」と呼ばれているということでした。

それから間もなく、バートは教会を紹介するパンフレット数冊とモルモン経を手に入れ、また誘いを受けました。私が夫のバート・ブランクに初めて会ったのは、そのお医者さんの診察室でした。そして次に会ったのは教会ででした。彼はすべての集会に出席しました。また、彼の鋭い質問に答えることができるように、教会員は一生懸命に勉強しました。

こうして彼は、神について説明してくれる人を捜しあてたのでした。神とイエス・キリストについてのジョセフ・スミスの説明は真理を告げていました。彼は、現実には触知できる体を持った神を理解することができました。歩くことができ、話すことができる神、顔と顔を合わせて会うことができ、前に自分が感じたあの大きな愛することのできる神。彼は長い探求の末に、バプテスマを施す権能を持った教会を見つけたことを知ったのです。そして秋のある日、冷たいウィラバ川で水に洗められた時から、彼の証は一度も揺らいだことがありません。

イエス・キリスト—— 待ち望んだ賜

十二使徒評議員会会長
エズラ・タフト・ベンソン

1 年の内には、贈り物をしたりされたりして祝う機会が何回となくある。そのような折に、私たちが主イエス・キリストからいただいているたくさんの贈り物の中から幾つかのことを思い返して、今度は自分が主に何をプレゼントしたらよいかを考えてみるとよい。

まず、主は私たちが見習うべき完全な模範、つまり主御自身を贈って下さった。主は、「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない」（ヨハネ15：13）と言われた。主は、この世における生活の模範を私たちに示して下さいただけでなく、私たちのために喜んで命を捨てて下さった。私たちに贖罪と復活の栄えある祝福を与えようとして、私たちには理解できない肉体と霊の苦痛を受けられたのである（教義と聖約19：15-19参照）。

信仰のために死ぬことを良しとしながら、信仰のために完全な生活を送ることに意を用いない人々がいる。キリ

ストは私たちのためにこの世で過ごし、そして死なれた。私たちはキリストの足跡をたどり、その贖いを受けて、あらゆる賜のうちで最大の賜、永遠の生命を得ることができるのである。この賜を受けるにふさわしい生活こそ大いなる永遠の御方、私たちの天父がたどられた道なのである。

キリストは、私たちにどんな人間になるべきかと問い、主御自身のようにする必要があると自ら答えられた。（III ニーファイ27：27参照）

キリストに似た生活をする者こそ、最も立派で、最も祝福された幸せな人である。それはこの世の富や権力、名声に全く関係がない。偉大さや受けている祝福や喜びをうかがい知る唯一の正しい尺度は、どれだけ主なるイエス・キリストに似た生活を送っているかということである。主は正しい道、完全な真理、豊かな命なのである。

心に絶えず浮かんで来て、私たちのすべての思いと行な



いを左右する言葉に、「主よ、わたしは何をしたらよいのでしょうか」（欽定訳使徒9：6）というものがある。この問いに対する答えは、キリストの光と聖霊を通して得られる。私たちに、キリストに従って行なうべき仕事がある。私は皆さんに証したい。主のみ業に対する報いは極めて大きく、いかなる世界でもこれに勝るものは得られない。

次に、キリストは生涯を模範として私たちに示して下さったほかに、予言者という贈り物を下さった。この世の人々の中で私たちが心から従っていかなければならないのは、だれよりもまず、導き手であり、予言者、聖見者、啓示を受ける者である末日聖徒イエス・キリスト教会の大管長である。彼は生ける水の源の最も近くに立っている人である。私たちに主の教えがあるが、それは予言者からしか受けられない。自分がどれだけ主の近くにいるかを知る良い方法は、地上における主の代弁者、予言者である大管長が主の靈感を受けて語った言葉をどのように感じ、それにどのように従っているかを見ることである。大管長が主の靈感を受けて語った言葉は軽んじてはならない。すべての人は靈感を受ける権利を有し、様々な人が自分の責任に伴って靈感を受ける資格を持っている。しかし、教会と世界に対する主の代弁者はただひとり、それがこの教会の大管長である。従って、人々の言葉は、大管長が主の靈感を受け

て語った言葉に照らしてはかるべきである。

主の予言者は生身の人間であるが、神は予言者に教会を間違えて導かせることはなさない。（「ウィルフォード・ウッドラフ説教集」pp.212-13参照）神はあらゆる事柄を初めから終わりに至るまで御存じである。従って、だれも偶然にイエス・キリストの教会の大管長になったり、偶然にその地位にとどまっていたり、また偶然に世を去ったりはしない。

私たちにとって一番大切な予言者は、この時代に生きている予言者である。神が現在私たちに望んでおられる教えを告げるのは、現代の予言者である。神からアダムに与えられた啓示は、ノアに箱舟の造り方を教えるものではなかった。どの世代にも古来の聖典は必要であるが、現代の予言者の告げる言葉もまた必要である。従って、あなたが最もよく読んで思索すべきものは、主の代弁者が主の靈感を受けて語った最近の言葉である。そういうわけで、教会の定期刊行物に載る予言者の言葉を注意深く読むことが大切なのである。

神よ、感謝いたします。この末の時代に私たちを導く予言者がいることを。

そして3番目に、キリストの生涯と主の予言者というふたつの賜に加えて、主の教会、末日聖徒イエス・キリスト教会、「全地の面に於ける唯一の真にして生命ある教会」



(教義と聖約 1:30) という賜がある。教会がなければ、私たちに救いも昇栄もない。バプテスマや神権、日の光榮の結婚、結び固めの力を受けるのは、教会を介してである。教会は、み業を確立し、拡張するために神がいつも用いられる組織体である。私たちは教会と共に、また教会の中で働き、教会を築き上げ、発展させてゆかなければならない。

私たちは自分の時間と才能と財産を惜しみなく教会に捧げるべきである。世に何が起ころうと、この教会は力強く発展し、主が再び地上に来られる時まで存続するであろう。

神はこの教会が背教のために再び地上から取り去られることはないという約束された。個人個人ではなく全体として、この教会を喜んでいっていると語られた(教義と聖約 1:30 参照)。それは、道を迷って去って行く教会員のあり得ることを意味している。影響力が大きい権威ある職に就いている人にも、そのようなことが起こり得る。過去もそうであったし、将来もそうであろう。私たちの信仰が肉の権力によらず、イエス・キリストによるならば、自分が人の教会ではなくイエス・キリストの教会員であることを知るに違いない。

もしも教会のだれかの言動を見て悩んだり、教会はこうあるべきだ、こうすればよいのにと不満に感じたりした時には、次の原則を考えてみるとよい。

神は、様々な霊的進歩の段階にある生身の人間を通して働かれる。人々が自分の悲しい経験から学ぶように、時には賢明と思われぬ要求を一時期認められることがある。ある人はそれを「サムエルの原則」と呼んでいる。イスラエルの民は、他の国家のように王を持ちたいと願った。予言者サムエルはそれを喜ばず、主に祈ると、主はサムエルに「彼らが捨てるのはあなたではなく、わたしを捨てて、彼らの上にわたしが王であることを認めないのである」と答えられた。そして王を持つとどうなるかその将来を民に警告するように言われた。そこでサムエルは民に警告した。しかし、民はそれでも王を望んだため、神は彼らにひとりの王を立てさせ、民のなすがままにさせたもうた。やがて民は苦難を味わうこととなった。神はそれを望まなかったが、ある範囲内で、人々に願いのままを許されるのである。愚かな経験は、進歩を妨げるだけの経費のかさむ授業である(サムエル上 8 参照)。

私たちは時々予言者の勧告に背を向け、世を真似て間違った教育思想、政治思想、音楽、服装に走ることもある。そして新しい世の中の標準が優位を占める。しかしその標準も次第に崩壊し、多くの苦難を被る。こうした中で、謙遜な人々はついには再び高い律法に立ち返るのである。

今日、数々の標準が下降線をたどる中で、義人はできる限り自分の標準を高く保つべきである。人々にそれを押しつけるのではなく、もっと良い時代を待ち望み、備えをすべきである。その時代は必ず来る。

それに関連してもうひとつの原則が思い出される。それは従う者があってこそ導く者がいるということである。高い標準を維持するには、それを守る立派な人々がいない場合

ばならない。

モルモン経には悪い枝の伐採の話が載っている。「良い枝の大きさと力とに応じて渋い実のなる枝を切りとってしまえ。しかし、悪い枝を一度に皆とってしまえばならない。もし一度にとってしまうと、接いだ芽にくらべて根の方が強すぎるから、接いだ芽が枯れて私は樹木園の木をみな失くするおそれがある。……その根と梢との力が釣合うように、良い枝が出るにつれて悪い枝を切りとってしまえ。ただし、良い方の枝が悪い方の枝に勝ったときはじめて…」(モルモン経ヤコブ 5:65-66)

シオンにふさわしい民だけがシオンの社会を実現させることができる。シオンの民が多くなると、シオンの諸原則がたくさん取り入れられて、やがては人々に主を受け入れる備えができるのである。それは時が来れば、主の靈感を受けることのできる教会員の書いた書物が多くなることも意味する。人の誤った教えに同感する風潮はだんだん下火になるであろう。いろいろな点で福音の真理を土台とする傾向が増え、また必要とあらば、その標準に照らして、この世がどういう点で欠けているのかを指摘するであろう。

また時が来れば、神のみたまの教えも増すであろう。しかしこのことは、人の教えが退潮して行ってこそ起こるのである。私たちははむべきこと、好まじきこと、徳高きこと、良き聞こえあることをたずね求め、ベートーベンやシェイクスピア、レンブラント、ミケランジェロを貴ぶものである。やがて、教会の内部からも多くの偉人が生まれるであろう。特に偉大な父親たる族長、気高い伴侶、母親たちが。ある種の音楽や絵画や衣服は姿を消すであろう。それは、流行が変わるためではなく、私たちの標準が高くなるためである。

あなたが教会のだれかの言動に悩む時、もうひとつの原則を考えるとよい。それは管理の職の原則である。王国が大きくなると、次第に多くの責任が委任され、管理の職が割り当てられるようになる。その管理の職への対応の仕方は、人によって様々である。神は辛抱強く、私たちが自分の責任を立派に果たせるようになるのを待っておられる。そして、神のみ前に昇るにもどこかへ落ちるにも、人に十分な長さのロープと時間を与えておられるのである。しかし、神が忍耐しておられる間、管理の職にある人間は、そのちっぽけな権力をいくら駆使しても主のみ業を妨げることはできないし、ゆがめることもできない。正義の神のうすはゆっくりまわるが、ひかれた粉は実に細かい。

神は人間に自由意志を与えられた。従ってその自由意志を誤用する人が必ず出るであろう。福音の網は善人も悪人も、最もすぐれた者も最も邪悪な者も捕らえる。最も邪悪な者とは、最後の清めがある前に、悪魔が王国を滅ぼそうとして送り込む手下のことである。現在、教会の中にそのような人々が幾らかいるが、やがてその人々は明らかになるであろう。時が万事を振りわけ、良い者は上げられ、悪い者は落とされるであろう。王国の中で人々に動揺を与えるようなことを目にしたら、それが自分の管理下にある場

合は、まず第一に本人のところへ行くとよい。またもしその上の権能を持つ人に伝えるべきものであると判断したならば、思いやりをもって、穏やかに、適当なレベルで必要な処置をするとよい。

教会の指導者に対する見解の相違を言いふらして争いや分裂を引き起こすのは、背教への確実な道である。私たちのなすべきことは、王国にしっかり寄り添って立つこと、キリストが与えて下さった教会という素晴らしい賜に対して、離反し悪感情を抱くように誘うものをすべて排除することである。

教会は真実のものである。律法を守り、集會に出席し、指導者を支持し、召しを受け入れ、神殿推薦状を受け、祝福を享受していただきたい。

4番目に、キリストの生涯と、主の予言者と、主の教会に加えて、聖典、特にモルモン経という賜がある。

キンボール大管長はワシントン神殿の献堂の祈りの中で、予言者ジョセフ・スミスが語ったように、モルモン経を最も正確な書物と述べた。予言者ジョセフ・スミスはモルモン経を私たちの宗教のかなめ石と呼び、「人がその教えに従って最も神に近づくことのできる書物」（「教会歴史」4:461）と言った。この書物は、現代の人々に宛てて書かれている。編集者のモルモンは示現で私たちを見て、神が私たちの時代に特に必要と感じられたことをこの書物の中に加えた。ブリガム・ヤング大学でモルモン経を宗教の必修科目に取り入れたのは主の靈感による。教職員や学生ばかりでなく、全世界の教会員が、何はさておきモルモン経に精通すべきである。その中の歴史や信仰を鼓舞する話だけでなく、その教えを理解しなければならない。真面目に自習をしてモルモン経に記された教義を学ぶならば、世の誤りを明らかにし、社会主義や人文主義や進化論などを含めて、現代の様々な間違った理論や人の哲学に対抗できる真理を見いだせるであろう。

教会内部で、モルモン経に通じ、それを愛読する人とそうでない人との間には、認識や見解や自覚や霊性の相違がある。この書物は立派なふるいである。

さて、キリストの生涯と、主の予言者と、主の教会、それにモルモン経は、キリストが私たちの一生に祝福として与えて下さる賜のほんの一部でしかない。

そこで、友である皆さん、私たちは主に何を贈ることができるだろうか。主が私たちのためにこれまでして下さったこと、また現在して下さっていることをよく考えてみれば、お返しとして私たちにできることが何かある。

キリストが私たちに下さった大きな賜はその生涯であり、犠牲であった。とすれば、キリストへの私たちの小さな贈り物も、私たちの生涯と犠牲ではないだろうか。現在だけでなく、将来も含めて。数年前に同僚のボイド・K・バックー長老がこう語った。「私は胸を張って申し上げたい。……私は立派な者になりたい。また、それが主にはっきりと通じて、自分が自由意志をどう使うか主が知っておられるという気持を抱くことが非常に大切なことを、私は身を

もって知った。私は主に祈った。『私はなまぬるくありません。み旨のままになさって下さい。挙手が必要ならば、挙手をします。私に何をされようと結構です。私から取り上げるものはないはずです。私は自分から捧げますから。すべてのものを、私の持っているすべてのもの、私の存在のすべてを。』そしてその時から、違ってきた。』（1950年夏、セミナリー・インスティテュート大会での話より）

確かに、自分の生活を神に捧げる男女は、自分の能力だけではとても及ばないたくさんものを人生から得得であろう。神はこのような人々の喜びを増し、視野を広げ、理解をさとし、体力を増し、霊を高揚させ、恵みを加え、機会を増し、心に慰めを与え、友を招き寄せ、平和をもたらしたもう。神のために自分の命を失う者は、永遠の生命を得るのである。

次に、キリストに捧げる私たちの犠牲について申し上げたい。福音に関して、犠牲は確かに一番の試金石である。人間はこの試しの世で、神の王国のことを第一にして生活するかどうかを試される（マタイ6:33参照）。永遠の生命を得るには、求められたならば喜んで福音のためにすべてを犠牲にしなければならない。イエスは金持ちの青年に、「もしあなたが完全になりたいと思うなら、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を持つようになろう。そして、わたしに従ってきなさい」と言われた。

この言葉を聞いて、ペテロが言った。「ごらんください、わたしたちはいっさいを捨てて、あなたに従いました。ついては、何がいただけるでしょうか」

主はこれに答えられた。「おおよそ、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、もしくは畑を捨てた者は、その幾倍もを受け、また永遠の生命を受けつぐであろう。」（マタイ19:16-29; 教義と聖約132:55）

ジョセフ・スミスは犠牲についてこのように述べている。「人間が、汚れやくず、かす以外のあらゆるものをイエスキリストを知っているおかげと考え、自分のすべて、名声や評判、榮譽、人望、家や土地、兄弟、姉妹、妻や子供、また自分の命さえも捧げるに至るには、自分は神のみこころを行なっているという単なる推定や信念以上のものが必要である。すなわち、この苦勞が終わった時に永遠の安息に入り、神の栄光にあずかる者になるという実際の知識が必要である。……すべてのものに犠牲を求めない宗教は、命と救いに必要な信仰を生み出す力を決して持たない。なぜならば、人間が存在するようになって以来、命と救いを楽しむために必要な信仰は、この世のあらゆるものを犠牲にせずして決して得られなかったからである。神が人を永遠の生命を受ける者として定められたのは、この犠牲を踏まえてのことであり、この犠牲がなければ永遠の生命は得られないのである。」（Lectures on Faith 信仰講義 pp. 58-60）

ブルース・R・マッコスキー長老は言っている。「犠牲はこの世につけるものである。永遠の意味では犠牲など存在しない。犠牲とは、より良い世界で祝福を得るという約

束の故に、この世のものを投げうつことである。しかし永遠の観点から見れば、すべてを捧げ、自分の命まで捨てたとしても永遠の生命がそうすることによって得られるのであれば、それは犠牲ではない。」(教義と聖約93-13-15, *Mormon Doctrine* 「モルモンの教義」 p. 664)

人は神のために自分の命を失う時に豊かな命を実際に見いだす。そのように、神のためにすべてを犠牲にする時に、神は持っておられるすべてを人に分けて下さるのである。

力いっぱい努めてみても、主に貸しができるわけではない。というのは、あなたがみこころを行なおうと努めると、その度ごとに主はもっと大きな祝福を惜しみなく注いで下さるからである。時には、祝福が来るのが少し遅いと思うようなこともあるだろう。それはきっと信仰の試しである。祝福は必ずやってくる。しかも豊かに注がれる。人知れずよいことをせよ、そうすればしばらくしてその報いは何倍にもなって返ってくる、という言葉がある。

ブリガム・ヤング大管長はこう語った。「キリストのためにこれこれの苦難にあったという人が実に多い。私はそのようなことが一度もないのを幸せに思う。うれしいことはたくさんあった。私は心の中でも人々の前でも、いつも苦勞をひとつの話にたとえてきた。すり切れてぼろぼろになった、汚れた上衣を着ていた人のところへある人がやってきて、新しい立派な上衣をくれるという話である。福音のために受けた様々な事柄を考える時に、私はいつもこのことを思い浮かべる。私は古い上衣を脱ぎ捨てて、新しい上衣を着てきた。」(*Discourses of Brigham Young* 「ブリガム・ヤング説教集」 p. 348)

聖徒たちは、決して罪人のように苦しみ悩まない。

ブリガム兄弟はこう言っている。「苦しみについては、喜びなさい。私たちの信仰に伴うみたまにあずかる男女には決して苦しみはないからである。しかし、神の御子の福音に従おうとしながら同時に世の思いに執着する男女は激しく厳しい苦悩と悲哀を被り、しかもそれは続くであろう。

敵のかせを投げ捨ててキリストのくびきを負いなさい。キリストのくびきは負いやすく、その荷は軽いことがわかるだろう。私は経験からそのことを知っている。」(ブリガム・ヤング説教集」 p. 348)

義しい母親が子供たちを深く愛する理由を知っているだろうか。それは、子供たちのために大きな犠牲を払っているからである。私たちは犠牲を払っているものを愛し、また愛しているもののために犠牲を払う。

少ししか与えない時には少ししか与えられない。

私たちはわずかな距離ではなく、全行程を主と共に歩もうではないか。罪の一部ではなく、罪のすべてを捨て去ろうではないか。

あるところにひとりの若い女性がいた。母を亡くした彼女は、自分のしたいこともせずに長い間退屈な仕事をして弟を育ててきたのだが、今度は自分が病気になって死の床に伏してしまった。彼女は監督を呼んだ。そして、死を間近にして、たこがで堅く節くれだった手で監督の手を握

りしめ、このように尋ねた。「私が神様のみこころを行なってきたことを、どうすれば神様にわかっていただけるでしょうか」と。監督は彼女の手をやさしく持ち上げると、「この手をお見せなさい」と答えた。

いつの日か私たちは、自分のために労してくれた主の両手を見るであろう。私たちの手は清らかだろうか。み業に励んだしるしがあるだろうか。私たちの心は清く、主の思いで満ちているだろうか。

私たちは毎週、主を指導者として主に倣い、どのようなことに対してもいつも主を忘れず、主のすべての戒めを守ると厳粛に誓約する。それに対して、主はみたまを注ぐと約束して下さる。

何年か何十年前か前、私たちは長兄イエスをよく知っていた。私たちは、御二方のように完き喜びを受けるため、喜んでこの世に来る機会を受け入れた。自分がどんなに天父と長兄を愛しているかを示すため、また地上で悪魔の妨害にあってもたゆまず従順であることを御父や主なる長兄に示すため、この機会を待ちかねていた。そして今、私たちはこの世にいる。前世の記憶を覆い隠されて、今私たちは神と自分とに、自分に何ができるかを示しているのである。閉ざされた幕のかなたへ行く時、私たちは天父をどんなによく知っているか、またみ顔をいかに見慣れているかを知って驚くだろう。そしてヤング大管長の言葉にあるように、自分はこの世で何と愚かだったことかとあきれるのである。

神は私たちを愛しておられる。私たちを見守っていて下さる。私たちが成功することを願っておられる。私たちはいつの日か、神が私たち一人一人の永遠の幸せのために、何ひとつ行なわないで残しておいたものがないことを知るであろう。私たちの知る限り、天には私たちを助ける軍勢がいる。今は思い出せない私たちの天上の友、私たちの勝利を願う友が。今は、私たちが自分にできることを実際に示す時である。毎日、毎時間、一瞬一瞬、神に対してどんな生活、どんな犠牲を捧げられるかを。そして、自分のすべてを捧げるならば、あらゆるものの中で最も大なる御方から、持てるすべてをいただくであろう。

あなたが最善を尽くす時、主は最善のものをあなたに報いて下さるのである。

神が常にあなたと共におられるように祈りつつ。

☆

☆

福音の教授と学習

セオ・E・マキーン

私たちの大部分は、折に触れて人を教える職に召される。また私たちは神権定員会集会や日曜学校、扶助協会に出席すれば、皆生徒でもある。福音の教授と学習というテーマで組まれた特集の第1回として、セオ・E・マキーン兄弟が、教師と生徒と天父という三者の関係を、次のように論じている。

子供の頃、農場での仕事のひとつに、父の羊にえさを与えることがあった。寒い冬の間、羊たちの生死はひとえに、夏の間に貯えておいた干し草や穀物を与えるかどうかにかかっていた。

それは確かに有益な仕事ではあったが、しかし春の訪れに比べれば物の数ではなかった。春になって囲いの門を開け、草の生えた斜面に羊たちを導き出すと、羊たちは自ら草をはむのである。えさをもらうために群れになって押し合うこともなく、羊たちは丘を自由に動き回り、青々と茂った牧場を捜して、十分な栄養をとるのであった。そして秋になるまでには丸々と太り、丈夫そうになっていた。

その後、私は伝道に出て同じような任務を果たすことになった。御父の羊を養うということである。私は、冬は去り、福音は回復され、新しい真理が地から湧き出で、そして「良い羊飼いに従うことにより神の子供たちは皆その真理を自らはむことができると宣言することにより、門を開けるといふ喜びを再び経験したのである。

私にとって神から受けたメッセージを宣べ伝えるということは大切なことではあったが、私はまもなく、求道者が神の御言葉を自ら研究するよう導くことの方が、私にとってははるかに大切なものではあるまいか、という認識を得た。そうすれば、求道者が自ら求め、学習し、そして聖霊の力によってこの福音が真実であることを心の内に、確信できるようになるからである。

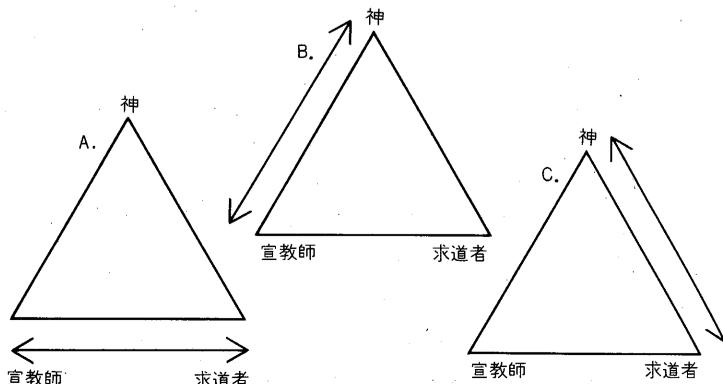
福音の教授と学習は、羊を養うようなものである。その過程が正しく踏まれれば、教師はおろか、生徒や神のみた

ままでもが、積極的に参加して来るのである。この三者が根本的にかみ合っていないならばならないことは、既に伝道活動で実証済みである。宣教師は、求道者に福音のメッセージを宣べ伝える。そして、次のA図のように求道者との交流を図る。

ここで宣べ伝えられるメッセージは、宣教師が自ら熱心に研究したり、祈ったり、教会の神権プログラムに参加したりして、神から得たものである。それを図に表わすとB図のようになる。

宣教師の伝えるものが証の力を伴うと、求道者の心を揺り動かすことになる。求道者も同様に、神や聖典や教会との個人的な関係を深めれば、理解力も増し、真理の証も得られる。その関係は次のC図のようになる。

この求道者と神との関係を培っておくことが極めて大切であることを強調しておこう。それは、宣教師の言葉



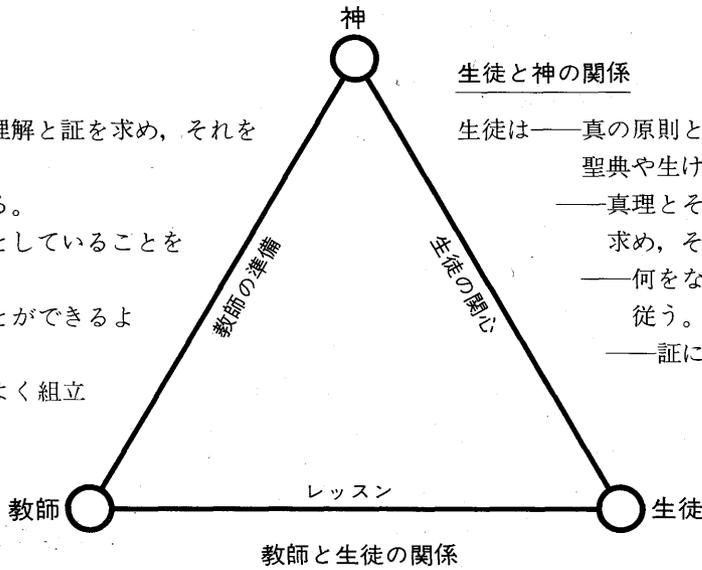
福音の教授と学習

教師と神の関係

- 教師は——真理についての理解と証を求め、それを得る。
- 従順の模範となる。
 - 生徒とその必要としていることを理解する。
 - 簡潔に教えることができるよう能力を高める。
 - レッスンを順序よく組立てる。

生徒と神の関係

- 生徒は——真の原則とその意味するものを求めて、聖典や生ける予言者の言葉を研究する。
- 真理とその意味についての理解や証を求め、それを得る。
 - 何をなすべきかを知り、また喜んで従う。
 - 証に従い、また証を得る。



生徒は——霊のことについて飢えや渴きを覚える。

——実行したいと思う。

教師は——必要に応じて生徒を激励する。

——聖典と生ける予言者の言葉から福音を説く。

——個人学習の指導をする。

——正しく理解しているかどうか調べる。

——証し、生活に応用するよう励ます。

だけの力で教会に加入した人々の信仰が不安定なことを考えてみれば明らかである。みたまの力による理解と証がなければ、そのような会員が道をそれて行くのは、時間の問題でしかない。

これは伝道中でも、教室でも家庭でも同じである。マーク・E・ピーターセン長老は次のように語った。「クラスの指導者として、私たちは宣教師でもある。もし私たちがクラスの生徒たちを自分の教えている教義に帰依させたいと思うならば、伝道中の宣教師と同様、証の力を使わなければならない。」(マーク・E・ピーターセン *Instructor* 「インストラクター」1970年8月号)

「宣教師」という言葉を「教師」と置き換え、「求道者」という言葉を「生徒」と置き変えたならば、教授と学習ということに根本的な関係を持つ三者が、それぞれ、いかに密接に関連し合っていないか、ということを上のように図示することができよう。

ゴードン・B・ヒンクレー長老は、この点に関して、極めて興味深い考えを述べている。それは、宣教師の教える方法を、教室や家庭で教える際の基本的なひな型として使うことが、非常に大切なことであるというのである。

「教義と聖約には、大切な聖句が書かれている箇所がある。私はこれまで、世界各地の宣教師と集会を開くたびにその聖句を読んできた。それは、1831年5月に、啓示によ

って与えられたものである。私は、この聖句は、宣教師に限らず、教えることに従事しているあなた方にも適用するものと思う。……質問と解答によく耳を傾けていただきたい。

『この故に、主なるわれ汝らにこれを問う。そもそも、汝らは何のために聖職の按手任命を受けたるか。』

その答えは、『真理を教えんために遣わされたる「慰め主」、すなわち「みたま」によりこれが福音を宣べんためなり。』

そして、みたまによって教える人々には、次のような約束が伴う。『この故に、教ゆる者も受くる者も互いに相悟り、両者共に徳に導かれて共に悦ぶなり。』(教義と聖約50:13, 14, 23) (ゴードン・B・ヒンクレー、『あなたたちは何を教えるべきか』1963年9月17日、ブリガム・ヤング大学教職員のための講演)

私たちの天父の羊たちは、飢えているのである。その羊たちを「緑の牧場」や「いこいのみぎわ」に導く私たちは、なんと栄えある機会に恵まれていることであろうか。教師も生徒も共に祝宴に列し、やがて皆「わたしの杯はあふれます」(詩篇23)と言うのである。

(本特集の次の記事は、図に示した教授と学習の様々な関係について説明するものである。)

証の力

十二使徒評議員会会員

マーク・E・ピーターセン

教会のあらゆる教授活動の究極目標は、人々を改宗に導くことである。

私たちがこれを目的としないのなら、教師やクラス指導者として存在する意味が失われてしまうし、また一教師としての失敗は、その召された責任に関する限り、その組織全体の失敗ともなる。

教会の教室や説教壇は、「公開討論会」が目的で存在するのでもなければ、議論の場でもない。また、教師自身の持つ個人的な思想や解釈や見解を表明するための、場として使用されるべきでもない。

教会の教室や説教壇は、福音学習の中心となるべき場所である。こうした施設設備を通じて、人々の心は揺り動かされ、身も霊も、主イエス・キリストの福音に帰依するのである。

パウロがローマ人に宛てた書簡の中の言葉には、私たちの胸を強く打つものがある。

「……主の御名を呼び求める者は、すべて救われる……

しかし、信じたことのない者を、どうして呼び求めることがあろうか。聞いたことのない者を、どうして信じることがあろうか。宣べ伝える者がいなくては、どうして聞くことがあろうか。つかわされなくては、どうして宣べ伝えることがあろうか。……」（ローマ10：13-15）

教会のクラスに出席する人々は皆、教えられる必要があるし、改宗する必要がある。福音は、その含蓄する意味も応用性も極めて広く、またその中に限りない知識が含まれているため、いまだかつて福音についてそのすべてを学び終えた人はいない。それ故、あらゆる人々が、教えられる必要があるのである。

教会のクラスに来る人は、大抵、やさしい義の種に「飢え渴いている」ものである。その種は、よく統制のとれたレッスンの中にある。そして、クラスの教師には、そうした必要を適切に教材を提示することにより満たす責任があるのである。その教材は正式に認可されているもので、偽りがなく、しかもいかなる疑問も入る余地のないものでなければならぬ。

上手に教えるということの中には、ただしゃべるだけではなく、適当な時に視覚教材を利用することも含まれる。また聖典からの引用は、どのレッスンでも不可欠である。私たちの教えることは、真実そのものでなければならぬ。そのためには、レッスンの際に聖典を豊富に使うことであ

る。

だが、クラスの出席者に、是が非でも改宗の心を起こさせたいと望むなら、またもうひとつの要素がなければならない。それが「証」である。

新しく改宗した人々に、教会に紹介されたとき何に一番心を打たれたかと尋ねると、ほとんど例外なく「宣教師の熱心な真心からの証」と答える。

クラスの指導者として、私たちは宣教師でもある、そしてクラスの出席者を自分の説く教えに帰依させたいと望むなら、私たちも、伝道中の宣教師同様、証の力を使わなければならない。

「教え——証し——バプテスマを施す」

これが、宣教師たちの取る段階である。私たちが教室で教える際には、やはりこの方法を使わなければならない。

最近、「目と目を合わせて」行なう教え方について多く述べられている。これは極めて効果的である。だがこの方法を使っても、献身的な教師がクラスの出席者に向かって、「目と目を合わせて」証をしなければ、完璧なレッスンとは言い難い。

レッスンが効果的にしかも確信を持って行なわれれば、それをしめくくるものとして、証以上のものがあるだろうか。教師は誠心誠意、「私は証します。私はこれが真実であることを知っています」と述べるのである。

この方法で、世界中の非教会員が改宗している。そしてこの方法は、教会のクラスに出席する人々を改宗へ、さらには再度の改宗へと導く上で同じように効果的なのである。

特別の影響は、真心からの証の後にやって来る。主が、その証を通じて、あふれんばかりにみたまを注いで下さるのである。私たちが外国で伝道中の宣教師として証をするときであろうと、家庭で家族に証するときであろうと、あるいはまたクラスの出席者に証するときであろうと、そのみたまを呼び起こす力は私たちにあるのだが、証を述べることがなかったら、私たちの教えは本当の意味で人の心を打つだろうか。

証が私たち自身の胸の中で燃え、私たちが恐れることなく雄々しくその証を述べるなら、必ずや心を動かすものがあるに違いない。改宗がそれに続き、それと共に、従順な人々には皆、救いがもたらされるであろう。

これこそ、私たちの証である。

総大会日程, 2 日間に短縮される

年次総大会ならびに半期総大会の日程変更が大管長会から発表された。これによると、これまで3日間の日程で行なわれていた総大会が2日間に短縮される。

大管長会は神権指導者への通達の中で次のように述べている。

「1977年4月の総大会は4月2, 3(土, 日)の両日開催されます。土曜日は、午前7時から福祉事業集会, 午前と午後的一般大会, 午後7時から神権大会が開かれ日曜日は一般大会が午前と午後2回開かれます。過去において金曜日に一般大会が開かれていましたが、金曜日は十二使徒会地区代表セミナーにあてられることになりました。

1977年4月総大会の日程は、今後の総大会でも踏襲します。すなわち、毎年4月と10月の第1日曜日と前日の土曜日に一般大会, 前々日の金曜日に十二使徒会地区代表セミナーが開かれます。」

このことは、春に行なわれる総大会の日程の中に教会創立記念日の4月6日を必ずしも含めないことを意味する。過去の4月の大会では、6日が週の間に来る場合でも、6日を含めて大会の日程を決めていた。1976年がその例である。

教会最初の大会は、1930年6月9日にニューヨーク州フェイヤットで開かれ、27名の会員全員が出席した。(Essentials in Church History, p. 82) 同じ年の9月にはフェイヤットで2度目の大会が開かれ、翌1931年には1月2日から10月25, 6日まで、フェイヤットからオハイオ州のカートランド、ハイラム、

オレンジカウンティへと所を移して行なわれた。その後は教会の発展と呼応して開催場所も変わり、オハイオ州アムハストからフェーウエスト、ノーブー、ウインタークォータズ、カウンシルブラフスへと移った。

総大会が4月と10月に開催されるようになったのは、聖徒たちがソルトレーク・シティーに着いてからのことである。その最初の大会が開かれたのは1848年10月6日から8日のことであった。中には例外もある。第89回総大会は、インフルエンザの流行のために6月まで延期された。また1957年の半期総大会は、アジア風邪のまんえんのために開催中止となっている。

聖徒たちが定住したのはグレートソルトレーク盆地だが、1885年4月および10月大会はユタ州のローガンで、また翌年はプロボとコールビル、さらに1887年4月の大会はプロボで開かれ、再度ソルトレーク・シティーで大会が開かれたのは、1887年10月の半期総大会からであった。

27名の聖徒たちによって始まった総大会も、今では数千名の教会員や招待客が集う会となり、会場もタバナクルに収容しきれない人々のために、同じテンプルスクエアのアセンブリーホールと、近くのソルトパレスが用いられている。またアメリカ合衆国、カナダ、メキシコ、中南米諸国、オーストラリア、ニュージーランド、フィリピン、香港、韓国、日本では、多くの人々がテレビやラジオ、電話回線を利用して間接的に大会に参加している。

発展するメキシコ、中央アメリカ

メキシコを初めとするラテンアメリカ諸国での教会の急激な成長は、末日の大いなるしるしであり、主の再臨がすぐそこまで来ていることを物語る。

十二使徒評議員会会員でありメキシコ・中央アメリカ地域担当顧問であるハワード・W・ハンター長老は次のように語った。「今は正にレーマン人の時代です。聖典の言葉が成就しつつあります。」

ハンター長老はメキシコで、過去2週間の内に4つの新しいステーク部を組織、ふたつを再組織した。さらにコスタリカでは、最初のステーク部を組織した。

この5つのステーク部の中のひとつが、教会設立以来800番目のステーク部に当たる。またユカタン半島に組織された2番目に新しいステーク部は、モルモン経の国の中心であるマヤ民族の間に設立された最初のステーク部である。

800番目のステーク部はベラクルス・メキシコ・レフォルマステーク部で、1月15日にベラクルス・メキシコステーク部から分割、独立した。もうひとつのステーク部は、ユカタンのメリダに組織されたメリダ・メキシコステーク部で、ベラクルス・メキシコ・レフォルマステーク部より1週間遅れて組織された。

ハンター長老の下で働く地域担当教会幹部は、七十人第一定員会の7人の会長のひとり、J・トーマス・ファイアズ長老である。

メキシコの教会員数は間もなく20万を突破する。新ステーク部設立に伴い、現在メキシコには40、中央アメリカには7つのステーク部がある。

ハンター長老は、この発展が教義と聖約の3章20節ならびに19章27節の、主の大いなる恐るべき日の来る前にレ

ーマン人に福音がもたらされるという予言を成就するものであると述べた。

「教会の世界的な発展のしるしとも言うべき800番目のステーク部が、急成長の拠点であるメキシコに組織されたことには大きな意味があると思います。」ハンター長老はそう語る。

「メキシコおよび中央アメリカはレーマン人の地であり、そこに住む人々の大多数はレーマン人の血統に属する人々です。」

ハンター長老は、教会発展のひとつの区切りとも言うべき800番目のステーク部が自分の担当する地域内に組織されたことに喜びの色を隠せない。彼は、デビッド・O・マッケイ大管長が亡くなった1970年1月18日に、500番目のステーク部をネバダ州ファロンに組織した経験を持つ人である。彼の言葉によれば、メキシコでは指導的立場にある人が続々改宗しているの、今後もさらに多くのステーク部が誕生するという。

ハンター長老は1967年にメキシコ・シティーを訪れたことがある。当時十二使徒評議員会会員であったマリオン・G・ロムニー長老を補佐して、メキシコ初のステーク部を分割するのが目的だった。それからちょうど10年。

「メキシコの発展はすべて最近10年間の出来事です。あの日、ロムニー長老は声をつまらせながらこう語られました。『レーマン人の時代が到来しました。予言は成就するでしょう。』私はあの日の、多くの会員たちの頬をつたった涙を忘れることができません。程なくして、教会では英語を話す国民よりもスペイン語を話す国民の方が多くなるでしょう。」ハンター長老はこう語った。

地元における指導力について、ハンター長老は800番目のステーク部のレ

オン・ロペスステーク部長の名前をあげた。彼はベラクルスステーク部創設以来1年半の間ステーク部長を務めた人である。

「今回分割したステーク部は、組織されてまだ1年半しかたっていません。ポサ・リカの場合も同じで、組織されたのは1年3ヵ月前です。会員数の増加により、どうしても分割が必要でした。しかし、地元にしかりした指導者がいなければ分割はできません。その点メキシコには優秀な指導者が大勢います。」

メキシコでの教会の発展について、ファイアズ長老はつい数年前に行なった教会の発展予測分析を取り上げた。

「あの時の予測では、ステーク部数が1,000に達するのは1985年でした。しかし1977年で800で、しかも1年間に75から100のステーク部が誕生しますから、3年以内には1,000を越えることとなります。つまり、1985年に実現すると予測したものが、1979年頃にはもう実現するわけです。」

メキシコでも同じことが起こっています。立てた予測が全く役に立たなくなりました。1975年のバプテスマ数が21,000名で教会全体のバプテスマ数の22.1パーセントでしたが、1976年はその倍の40,000名近くになりそうです。これは実に興味深い数字です。

さらに家族数について見てみると、もっと興味あることがわかります。1975年に改宗した家族の数が4,849であるのに対し、1976年上半年は3,907家族が改宗しました。この数字は最終的なものでないので、実際にはもっと増えて、1976年全体では1975年のほぼ2倍になるでしょう。」

この驚異的とも言えるレーマン人の改宗は、正に主の再臨に近いことを告げるひとつのしるしである。



明日に夢と希望をもって

日本福岡伝道部
佐世保支部
渡辺節子

ここに証できますことを心から感謝申し上げます。

私の家庭は母子家庭です。高校生と中学生の兄弟3人と共に生活しています。私は、過去の悲しみや苦しみに打ちひしがれて、毎日を暗い気持ちで過ごしていました。そんな時、あれは確か、2年前の9月も終りに近づいた頃のことです。突然表の方から「ごめん下さい」と声がしました。「あら、だれかしら」と思って「はい」と答えて立ち上がり、ひょいと表の方に目を向けた時です。まっ白なワイシャツにいきなネクタイをきちんとつけて見るからに清潔で品のよい外人の方がふたり立っておられました。

「私たちは末日聖徒イエス・キリスト教会から参りました。もしよろしかったら、10分位お話をしたいのですが」と言われました。あんまり日本語がお上手でしたのでびっくりしました。ちょっととまどいしましたが、「どうぞ中にお入り下さい」と申しました。そして初めて福音の教えを聞く機会に恵まれました。彼らのお話を聞いております内に、私は何となく心がなごみ、とても暖かいものを感じました。その夜、3人の子供たちにも話し、次の訪問の日を心から楽しみに待っていました。そして、何回か訪問とレッスンを受ける間に、家庭の中も次第に明るくなり、楽し

さがよみがえってきました。

レッスンの中で家族の愛と一致を知り、また一番大切な家族の会話を悟ることができました。私たち家族が初めて教会に集った時、会員の一人一人は、愛と笑顔で迎えて下さいました。全く暗い世間しか知らなかった私は、本当に夢の国にいるような気持ちでした。本当にこんな素晴らしい教会が私の住む町にあったなんて、私はもちろんのこと、3人の兄弟たちもびっくりしました。それから、長老の訪問とレッスン、毎週の安息日が待ち遠しく思われるようになりました。しばらくレッスンを受けて、明るくなる年の6月14日、家族そろってバプテスマを受けることができました。

教会に集って2年目を迎えた今は、家族の一人一人が大切な責任をいただいて頑張っています。多くの迷いと周囲の誘惑もありますが、私たちは、天のお父様が私たちを愛をもって守っていて下さることを信じています。私の家族をこの素晴らしい教会に導いて下さった長老に心から感謝しています。

神様は確かに生きておられます。この教会が真の教会であることを心から証致します。イエス・キリストのみ名によって証致しました。アーメン。



家庭に信仰と希望と愛を

日本福岡伝道部
大牟田支部
金納利勝

ある日、私たち家族は、ある施設の子供を里親として預かりました。その子供は10歳、8歳、3歳の3人兄弟で、父親の酒乱により母親は蒸発し、捨てられたのです。その3人兄弟の8歳の子供を2日間あずかり終えて施設に送り届けた後、帰ろうと思って車に戻ったところ、送り届けたはずの子供とその姉が車のところで私を待っていました。そしてさようならと言いながら、いつまでも手を振って車を追いかけて来るのです。私は目頭が熱くなり、子供を捨

てた親を恨みました。その時教会の長老から頂いた名刺に「いかなる成功も家族の失敗を償うことはできない」と書いてあり、この子供の親がこの教会を知り、知恵の言葉を聞き入れていたら、子供は捨てられず、神様により救われたであろうと思い、私はこの時、本当にこの子供をお救い下さいと祈りました。そして施設の子供をあずかったことが偶然とはいえ、何か神様が導きを下さり、私たち家族にこの子供を通して家庭の大事さと知恵の言葉を教え示された

ように感じ、それからバプテスマを受けようという気持ちが強まりました。

しかし、教会の戒めを守ることは簡単ではありませんでした。兄弟姉妹の方々が皆寛容で、愛情に満ち、戒めを守っておられるのに自分にはなかなかできないのです。ところが、ある日モルモン経を読んでいると、イテル書12章の中からひとつの聖句が目にとまりました。

「望みは信仰から生じて人の心の錨になるものであるから、この錨のために人はしっかりしてびくともせぬようになる」 私はこの聖句の通り、教会の兄弟姉妹全員が、神様の福音を学ぶことによって誠実で自信に満ちた生活をしておられることを知りました。この教会の聖典が神様の靈感によって書かれた物であり、私たちは戒めを守ることによって成長するのです。私は信仰を持ち、聖典を読み、福音を学ぶことによって、知恵の言葉などの戒めを何ら抵抗なく守ることができ、12月3日バプテスマを受けました。この時も、私たちのために、兄弟姉妹が皆寒い中を集まって

心から祝福して下さったことに感謝で胸一杯でした。中でも、私たちが最初にお会いした長老が遠方より出席し、涙ながらに心温まる話をして下さいました。私たち家族は、本当に今までにない幸福を味わいました。そして、私たちには長老が天使に見えました。この日が私たち家族の記念すべき日であり、この素晴らしい教会に巡り会えたことに、これも神様のお導きであると心から感謝しています。これが新たな人生の出発点となり、今では家族みんなが同じ気持ちで同じ考えを持ち、何事も話し合うようになりました。毎週家庭の夕べを開き、計画を立てて約束を果たすようお互いに努力し合う、そんな明るく楽しい毎日を送れることを感謝しています。これからも真の教会「末日聖徒イエス・キリスト教会」の会員として、神様の福音を学び、真理を知ることによって、信仰と希望と愛を深めていきたいと思ひます。

すべてこの話をイエス・キリストのみ名を通してお話し致しました。アーメン。



この限りなく美しい讃美の歌

昨年の12月18日、日本東京伝道部高崎地方部の兄弟姉妹たちによる「群馬 L.D.S. 聖歌隊クリスマスコンサート」が、群馬県社会福祉協議会、群馬テレビ、上毛新聞の後援を受けて行なわれ、好評を博した。

◇お詫び訂正◇

聖徒の道2月号p.51、十二使徒評議員会会員ハワード・W・ハンター長老の説教「キリストが受けたもうた誘惑」の中に以下の誤りがありましたので、お詫びして訂正いたします。

p.51、1段目上から26行目 天の3分の2の霊——→天の3分の1の霊

